

青麻刈りて 種つみすてし 畠かな

二九六

(明治三十八年八月八日於古城營)

秋立つや 朝饌のばたの やや硬き

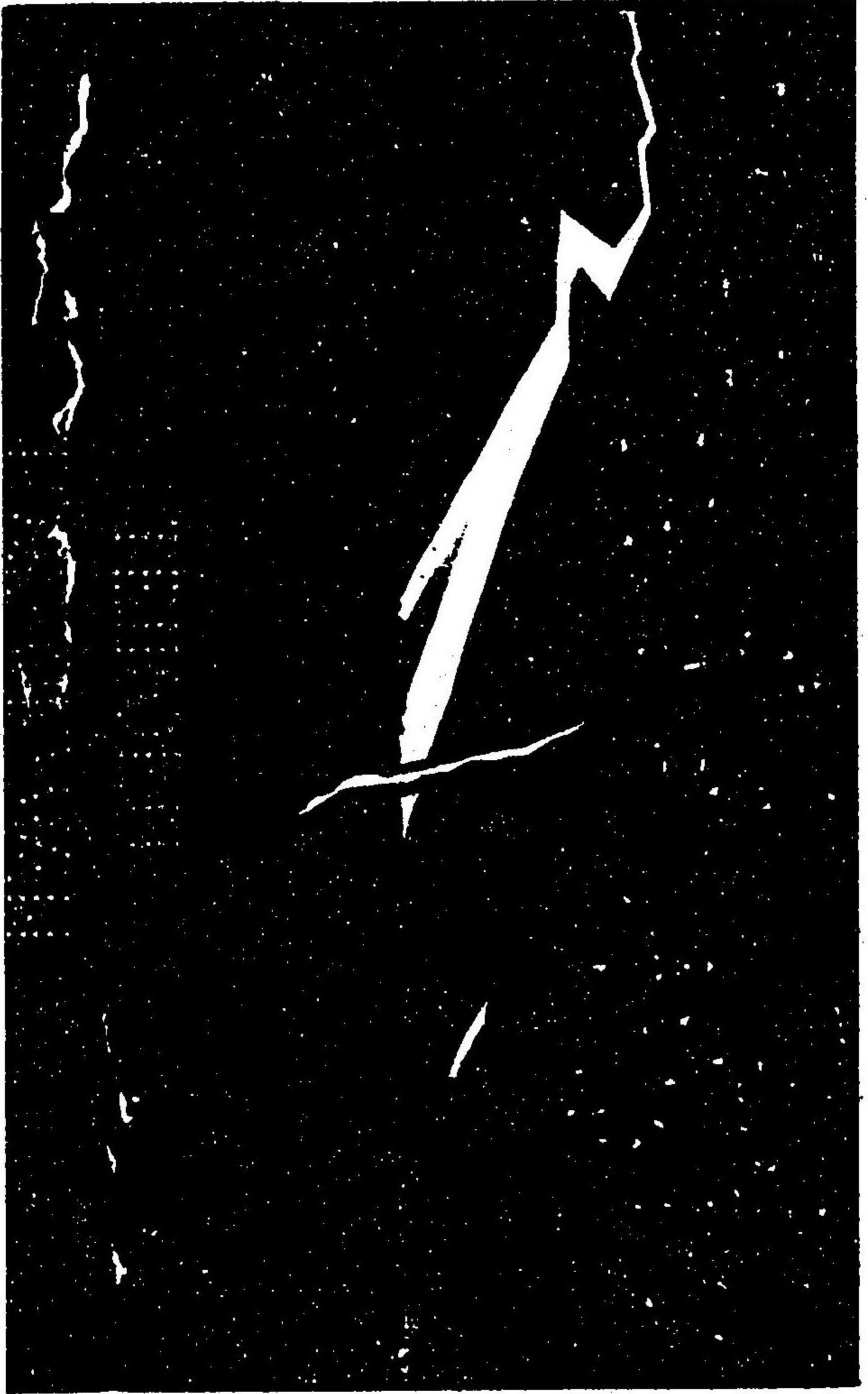
玉突や 秋立つ朝の きゆうの 冴

秋立つ日 勅使迎ふる 陣屋かな

縫薄や 稻妻しげき 地平線

稻妻の 朱や灰いろの 雲の裾

二九七



〇〇〇〇



督^{とく}亢^{かう}の 圖^ず窮^{きゆう}まりて 稻^{いな}光^{ひかり}

（明治三十八年八月十二日於古城野）

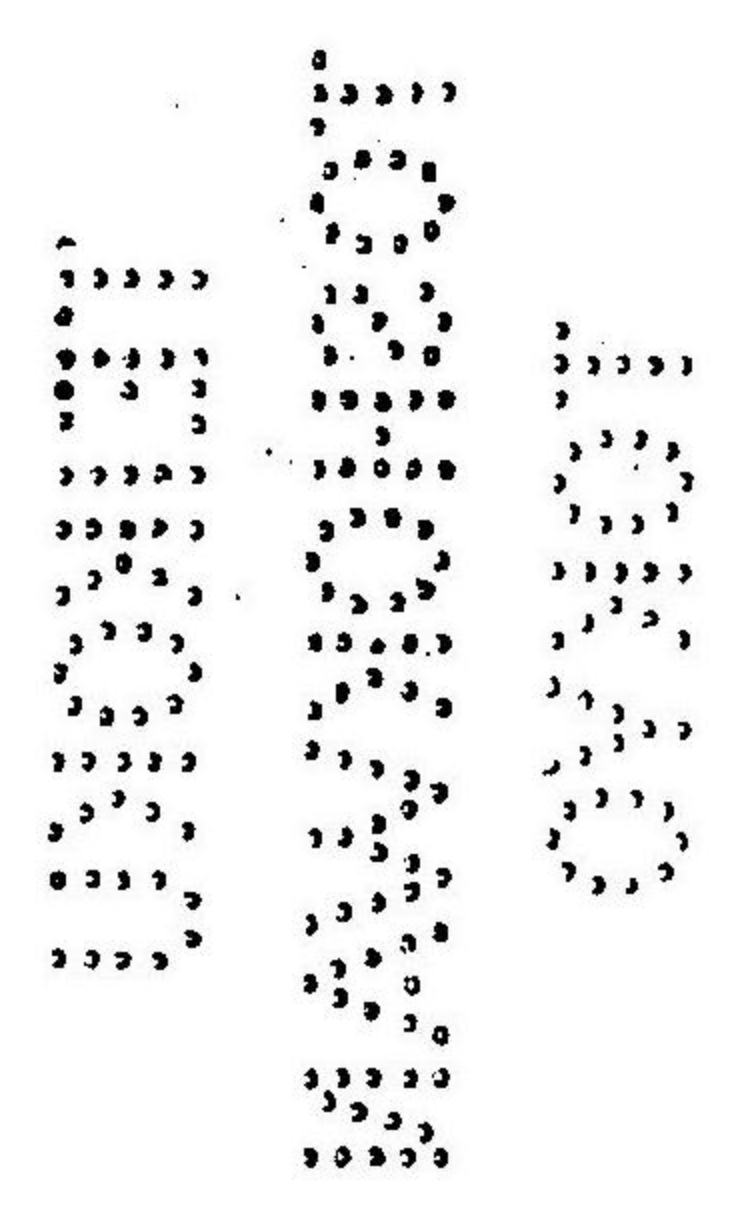
病^{やま}める王^{わう} あさとぶらふと 道^{みち}芝^{しば}の



露^{つゆ}わけゆけば ころも冷^ひえぬ

露^{つゆ}の朝^{あした} 前^{まへ}裁^{ざい}はゆる 秋^{あき}の花^{はな}
病^{やま}みては王^きの いでも見^みまさぬ

(明治三十八年八月十九日古城
に於て三茶莉の退院を聞く)





院しぞく日 猶病める子の 病の名
 おぼろかなるを たのみけるかな

(明治三十八年八月三十一日於古城堡)

あたの國 直隣國 迫門をだに

へだてぬ國と なりにけるかな



(明治三十八年九月六日古城堡より迷河の邊
 なる古城子に往くとき雙樓台の下を過ぐの邊)

あららぎの 倒れもやせん いくさ皆
 石うちかきて 家づとにせば



草くさはむ駒こまを にくみけるかな
 隠かく沼ぬまに ふみこみし足あし えもぬかて

(明治三十八年九月七日古城子
を發して六家子の軍橋に至る)



夕ゆふ風かぜに そよめきわたる 高たか黍あまの
 穂ほ波なみのうへを ゆくしら帆ほかな

自日三家子より北のかた通江口に至る

川がは隈かたに よとみてかわく 泥どろのみち
 ふめば蹄かかとの またにゆちめく



黍赤く 菽黄なり秋 十三里

(明治三十八年九月十一日阿吉牛泉堡子に至る)

(明治三十八年九月十四日古城堡)

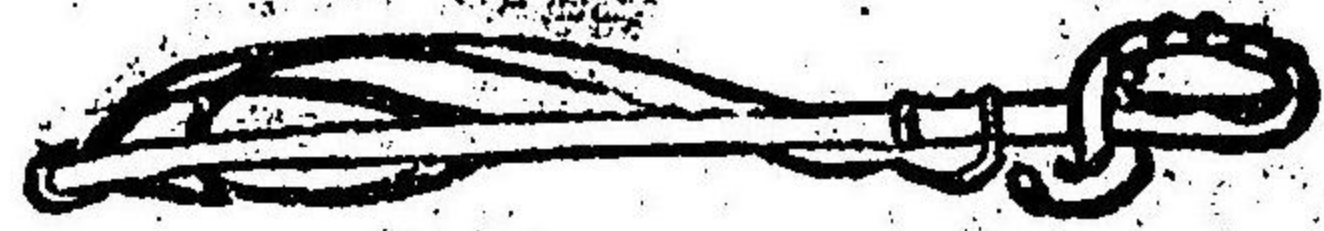


とりはなし しばし舟やる 船橋の
つめに割籠を 開きけるかな

(明治三十八年九月十五日古城堡)

熱引くや 立待居待 一分二分

三〇六



対黍の 戈を偃せたり 露の中

(明治三十八年九月二十二日 古城堡より亮合堡にゆく)

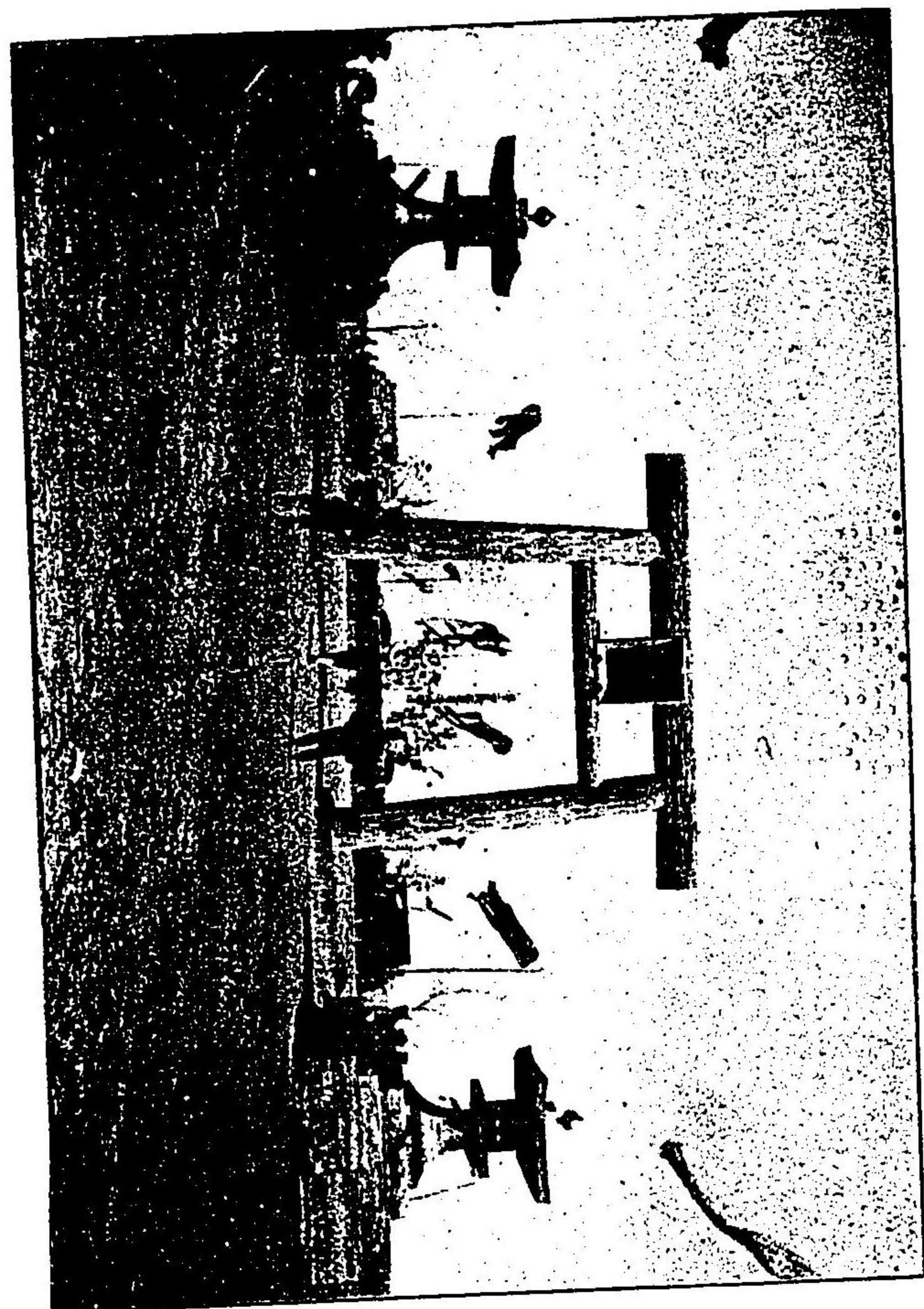
Grid of small characters or symbols, possibly a decorative border or a specific type of text.



魂を招くこと遠からず 秋の風

(明治三十八年九月二十四日於遠達産祭場)

(明治三十八年九月於古城堡)

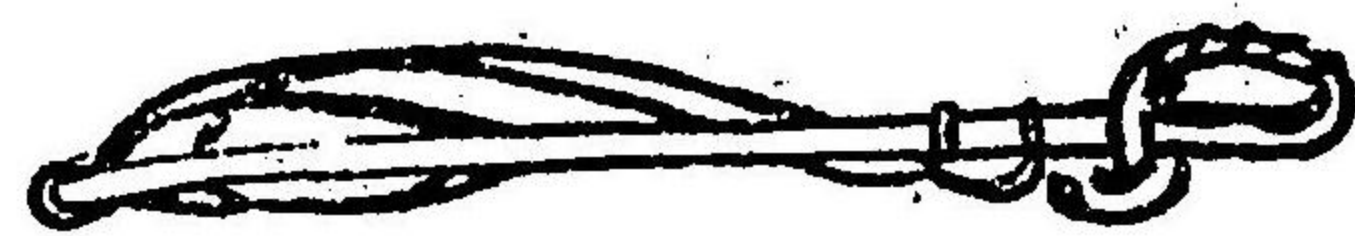


Vertical text on the right side of the photograph, likely a caption or description.

火^ひ箭^やためす　よすがら玉^{たま}屋^や　鍵^{かぎ}屋^や哉^{かな}

翠^{ひび}が矢^やに　九^{きゅう}日^{にち}墜^たつる　花^{はな}火^ひかな

髯^{ひげ}すこし　綾^{あや}香^{かう}花^{はな}火^ひに　焼^やかれけり(記事)



會^{かい}堂^{だう}の　門^{かど}に踊^{なごり}の　とよみかな(傳道の友を憐む)

霜^{しも}に傲^{あご}る　菊^{きく}正^{まさ}宗^{むね}の　新^{しん}酒^{しゆ}かな(灘の新酒至る)

ことし酒^{さけ}　酌^{しやく}むに月^{つき}支^しの　頭^{かしら}かな



吊^{つり}烟^{たばこ}草^{くさ}　かあさい色^{いろ}の　簾^{すだれ}かな

三十一
三十一
三十一

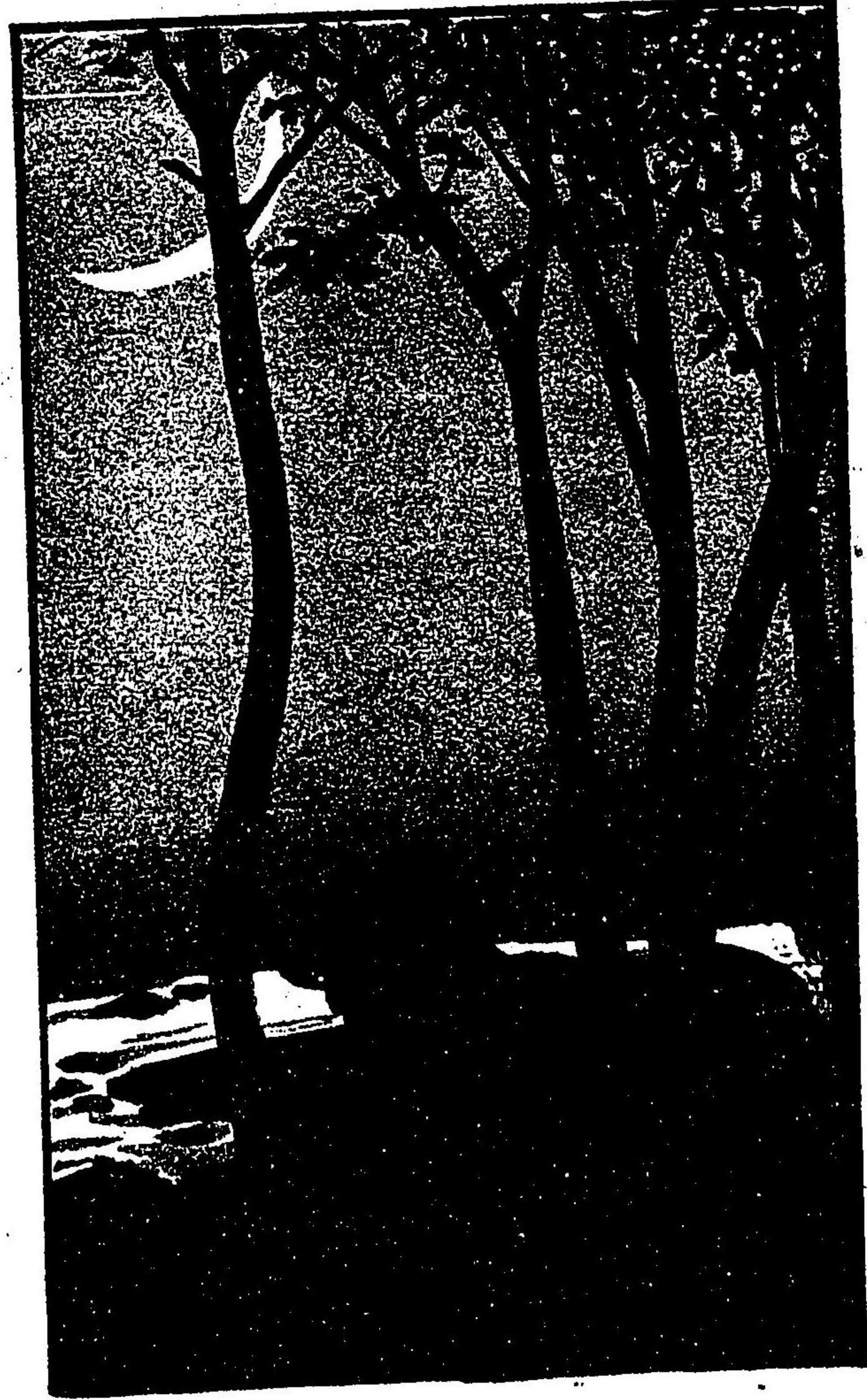


感状かんじょうや
美うつくしき土つちの
はかり芋いも

圓壘まへの
雨あめに野の生なまの
桔梗ききょうかな

誰たれ殿どのの
槍やりか葡萄ぶどう鞆たもと
われもかう

夕顔や 山羊よびいるる くづれ垣



夕顔や 山羊よびいるる くづれ垣

胡桃 (能事)



喰めと割れねば たなうらに
載せて眺めし 猿の子の
工夫さかしき 石の下

割れて實のなき 胡桃かな



西瓜黄なる 核は瑠璃の 黒斑かな

鬼灯やおとうと呵る 姉の口(能事)

朝寒の 足半はける 毛臙かな(讀史)

ほきと折る 秋の膠や 繪の支度

くしげあけし 浦嶋が子や 秋の蝶





(明治三十八年十月七日古城堡より長嶽子に往く)

何窩棚 何屯黄なる もみぢかな

やどり木や 高きに居りて 末枯るる



(明治三十八年十月十六日平和條約批准の報至る)

旗捲いて 歸んなんいざ 暮の秋

氷

(明治三十八年十月十七日於古城巻)

門の外の水に氷の

地隙にたまる
一重ぞ結ぶ

籠居の胸に憂の

冬また近き
こも一重添ふ



朝霜や 生木の橋の 欄の上

千からびて 藺むしろ折るる 小春哉



木枯に 大天幕の あふりかな

(明治三十八年十月十九日於古城堡)

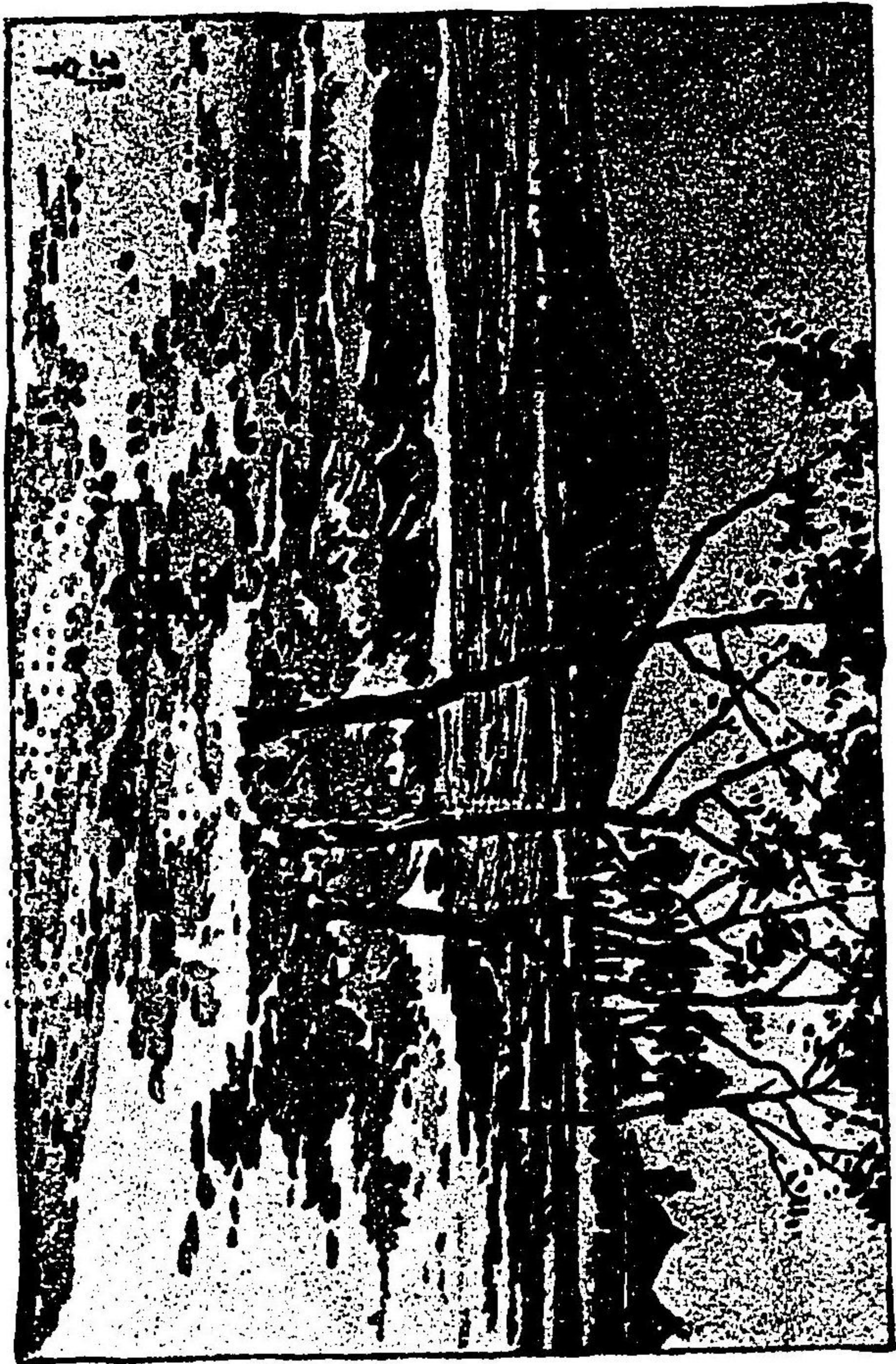
唐突や 初雪やがて 初ふぶき



唐の煤 いま一度拂いて 歸れとや

(明治三十八年十月二十三日凱旋順序を示さる)

をさな子の 父はと問はば 松立てて
迎へん春の 人とこたへよ



古城堡

(明治三十八年十一月七日)

三〇

飾おろしし
いづくも同じ
南より來し
そそのかされし
黄なる土射る
地隙にわたす
老ばしたたずむ

頭のさまか
荊迹の野を
まらうと風に
そぞろありきよ
眞晝日映ゆし
土橋を過ぎて

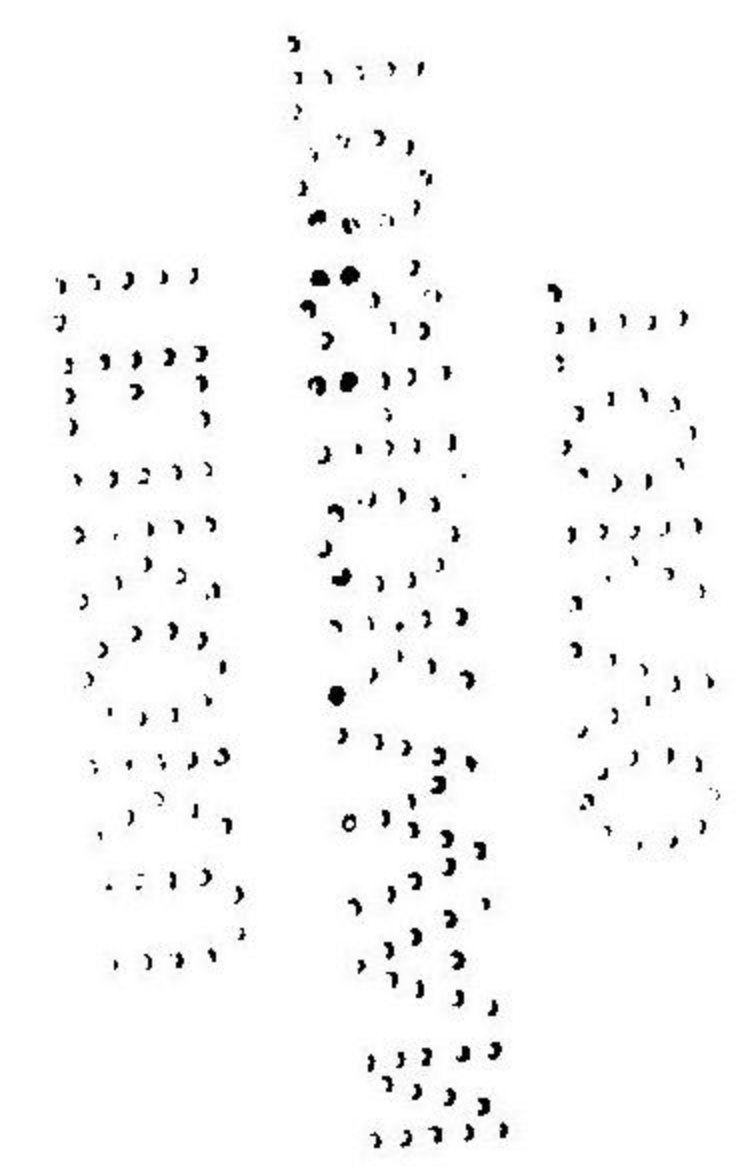


汶またにわかるる
 岬みさきのごとく
 丘かみのつかさに
 秋あきにあらがび
 木こ枯かにこそ
 見みよ馴じ鹿かの
 そそり立たてるを

地ち隙ひまに臨のぞみ
 せばまり出いづる
 楡いの木き立たてり
 くらみし青あ葉は
 かつて鳴なりしか
 角つめく枝えの

楡いのもとには

わがふる里さとの





土ぐらに似て
 城隍廟ぞ
 乾ける磚瓦
 ふとさし覗く
 塑像はあらず
 木の葉からから

ややちひさなる
 いつかれにたる
 冬の日を浴む
 龕のうちには
 風ふきいりて

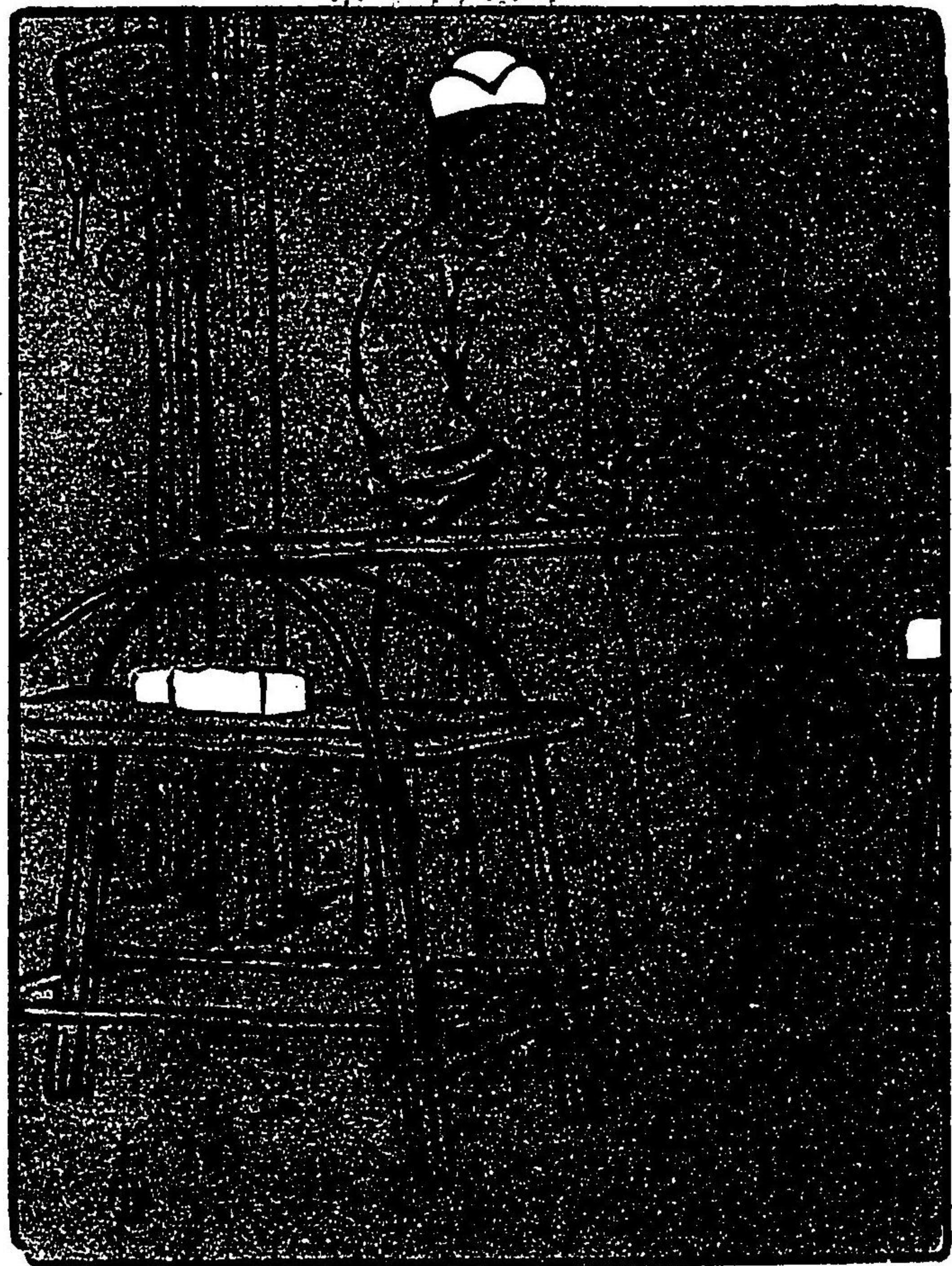


草枯や 並み立つ蓼の 赤き莖

雪をりをり 頬の上に點す 薄くもり

撲つ窓の 障子も濡れぬ 粉雪かな

ウロウロ
カウロウロ
ウロウロ



二とせや

毛の脱け落ちし

毛皮鞆

鉏焼や

こほれる肉の

一片片

煮凝に

なりし肉泊を

解かしけり

三三三
三三三三三
三三三

橋をゆく 寒き提灯 一つかな

西施おもへ 胼の友なほ 紗を浣ふ(偶感四)

湯婆抱いて 上陽宮に 老いにけん

庵丁の 風呂吹に忌む すだち哉



UNIONET
HAWAIIAN
CYNOT



太刀佩いて 支遁が鷹の 心かな

三三

(明治三十八年十一月三十日古城堡より開原に至る)

乗りいゝる 川の渚の うすらひの



入海の氷のうへの日の出かな

(明治三十八年十二月一日金州を通ぎ旅順に至る)

砕くるおとに駒ぞいさよふ



善

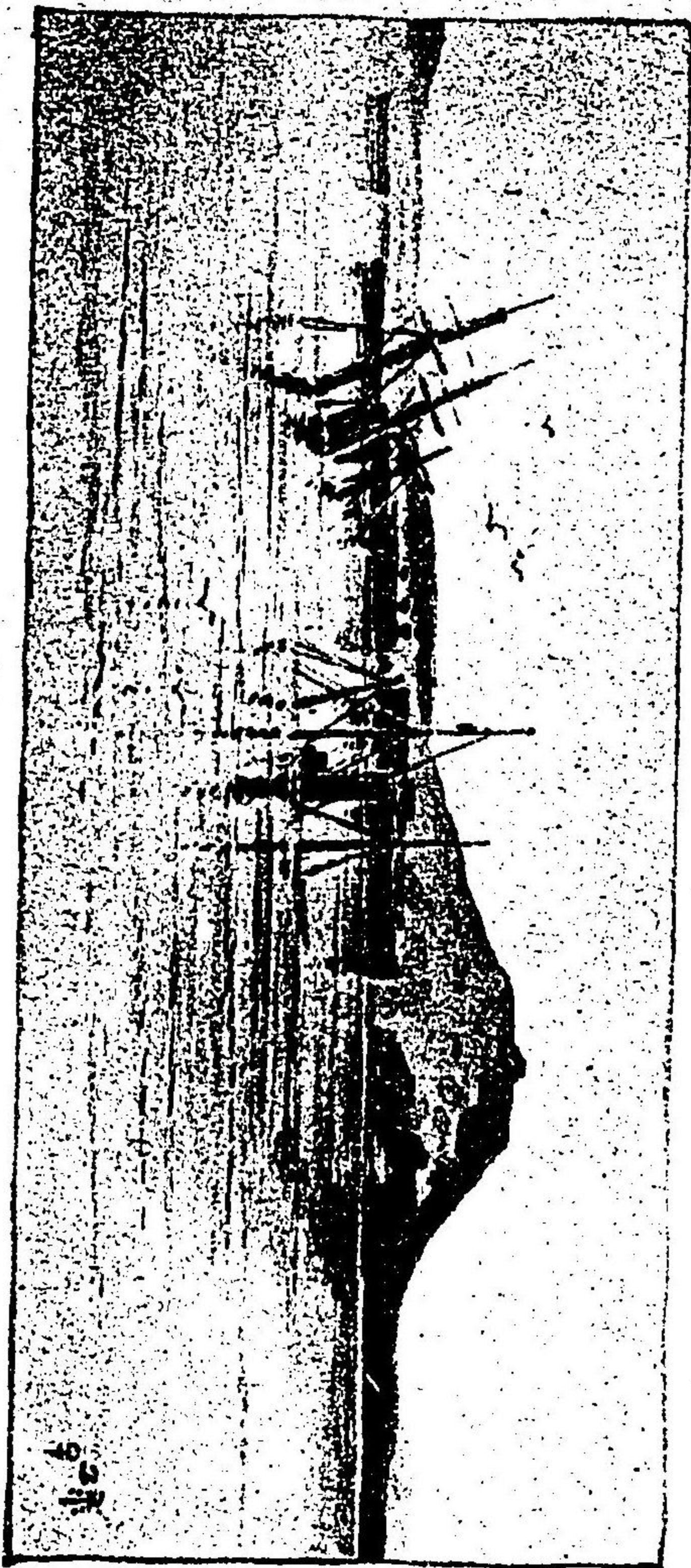
水鳥や 閉塞船の 艦にうく

三二八



指さすや 皆砲台の 冬の山(三番三高地)

(明治三十八年十二月二日於旅順)



水鳥や 閉塞船の 艦にうく

三二八

(明治三十八年十二月二日於旅順)

指さすや 皆砲台の 冬の山(二零三高地)

攻めいりし 穴見る寒さ 紙燭かな(松樹山)

爆破せし あと磊磊と 冬の石(三龍山)

丈低き 枯木まじりて 小松原(鶴冠山ニ)

弾片を 裏んで歸る 袖寒し





日のぼるや 冬の山山 かげひなた

(明治三十八年十二月四日旅順より大連に至る)

山開けて 汐さる寒く 沖にたつ



冬の灯の 軒ごとに御 料理哉

琵琶の撥 絃に挿めば 千鳥かな

(明治三十八年十二月五日大連を發す)

牡蠣の苞 窓より受けて 發車かな

(明治三十八年十二月六日於營口)

冬の夜や 出稼の妓 宴に侍す



(明治三十八年十二月八日於遼陽)

石棺の 蓋とりておくや 雪のうへ



(明治三十八年十二月二十八日於古城堡に日開る原)

假寐の 頭巾ならぶや 瀛車の中

鶏鳴や 氷はなさく 瀛車の窓

さらさらと 氷ふるるや 橋ばしら



(明治三十八年十二月二十八日於古城堡)

玉くしげ あけばいなんと 老らくの
伴ふ年の うたて待たるる





短日をかしく詰めし 行李かな

三三六

(明治三十八年十二月二十九日古城堡を發す)

見かへるや 一とせ棲みし 雪の家



行年を 元れし印の 未鍊かな

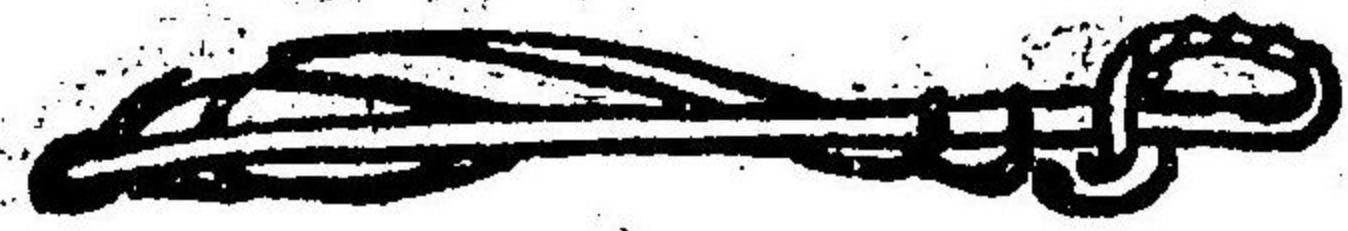
(明治三十八年十二月三十一日於鐵嶺記事)

三三七

（明治三十九年一月一日於廣島）

書初や 檄を草せし 去年の筆

凱旋や 元日に乗る 上り瀛車



せめては草

（廣松婦人會の爲りに作る）



鴨緑の河 満洲の野の 再び登りて 待てば久しき いざや迎へん

越えてより 高黍や 刈られけん 歳月よ 皇軍を

白楊疎に

蔭もなき

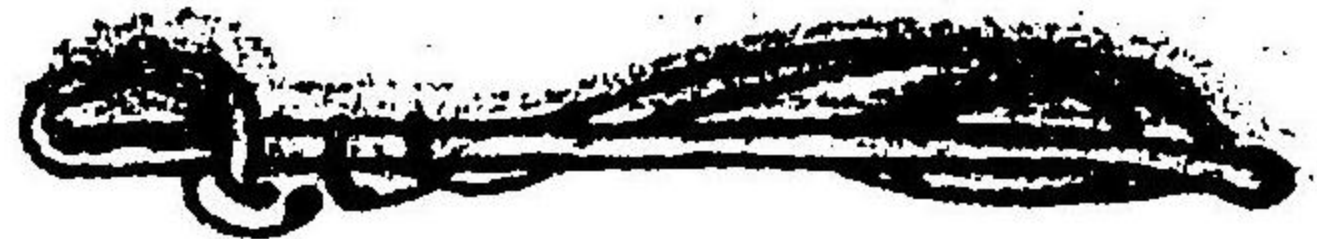


廣野の夏や
狡兎を倣ぶ
冬の夜や將
いざや迎へん

奈何なりし
土窟の
奈何なりし
皇軍を

愛兒討たれし
うから同胞
友喪ひし
好くぞまささく
いざや迎へん

將軍よ
魂あへる
つはものよ
還りぬる
皇軍を



陸に奉天
海に艦皆
捷にふさはぬ
忘れて今日を
いざや迎へん

おとしいれ
洗めてし
獲をば
祝ひなん
皇軍を
あるさすと
樺太も
おもひでに

日ごろ御國の
惜みし領土
この戦の



せめては半
いざや迎へん

還されぬ
皇軍を

人の嫁の

衣織りし

恨十とせの

遼東も

この戦の

おもひでに

せめては我手に

落ちにけり

いざや迎へん

皇軍を

望の夜過ぎて

月は虧け



敬器も満つれば
満ち足らはざる
なかなか裔の
いざや迎へん

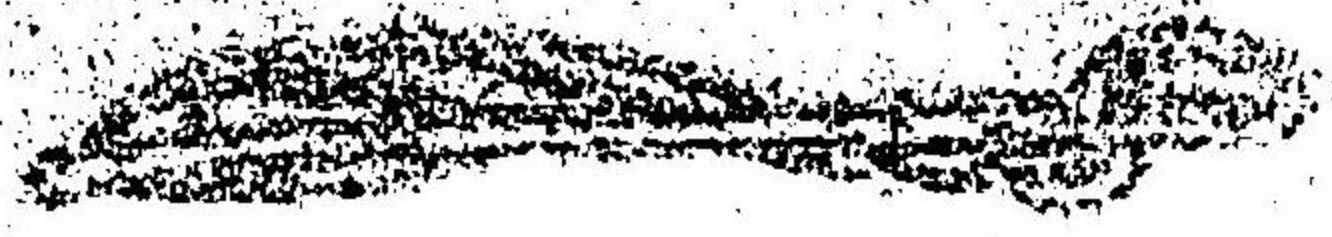
覆る
平和ぞ
幸ならん
皇軍を

白き薔薇に
口なし色の
今は扶の
耀く地の
いざや迎へん

けおされし
笹の菊
杖繁く
中黄色
皇軍を

隕石

うづ寶 えつとほこりし 手には權
玉はみそらに 星とかがやく



Faint, illegible text or markings on the right page, possibly bleed-through from the reverse side.



十人

(MOISEN.)

血のあめの	みそかには	さればこそ	血ぬるべき	いざや鼓手	懸命の	わるしやわに
ふりしきる	帯すなれ	ふるさとの	わが武器は	鼓うて	戦に	蹴く
ぶらがの役に	第四聯隊	千戦のち	ただ銃剣あり	うちたつゑるしに	丸をなうちそ	千兵ちかひぬ



戦友の
怨ある
手にとれる
生軽く
ぶらがこそ

ひとりだに
わが仇を
銃劔の
令重き
稱ふらめ

丸はうたざりき
たふさん武器は
外あらざりき
つはもの知れる
第四聯隊

千よろづの
仇よせし
仇の胸
一すぢの

火ぐちより
里の名よ
貫きし
血路をぞ

毒烟吐きて
おすとろれんか
銃劔の尖
衝き開きてし



こころみに
かの里は

往きて問へ
え忘れじ

おすとろれんかに
第四聯隊

戦友は
用ゐたる
運命は
戦友の
血の波を
その血しほ

相踵ぎて
武器はただ
わが讎と
ひとりだに
海に遣る
流ししは

たふれしかども
銃劔なりき
なりにしかども
丸はうたざりき
あすらの流
第四聯隊

うれたくも

本國は

うしなはれしよ

いまさらに

誰が罪と

問ふことなかれ

生れしを

悔い泣くや

ぼおらんと民

いくたびか

ふるき創

血をながすらん

その創の

ふかきこと

國內こそりて

孰か能く

我に若かん

第四聯隊

わが右に

わが左に

並びゆきつつ

たふれしを

まのあたり

見し友さらば

創おひて

悲しくも

われ等猶生く

猶生きて
天にいます
十人のみ

たよるべき
おほ神よ
のこりたる

本國はなし
めぐみを垂れよ
第四聯隊に

霧深き
歩兵十人
涙の目
止まれ誰そ
そのひとり
ただ十人

朝まだき
たどりゆく
暗うして
十人みな
答ふらく
のこりたる

ぼおらんとより
おるしやさして
ことば絶えたり
はたと止まりぬ
國は滅びて
第四聯隊

三騎

(GENAUS)



戦敗れて
騎兵みたり
あづかにしづかに
のりてぞ行く



血深き創より
ながれ落ちて
ぬるきしめりをぞ
馬おぼゆる



手綱より鞍より
血したたりて
白沫を塵を
洗ひ落す



馬はいとゆるく
ゆるく行けり
さらずば血出でん
早く多く



みたりは馬の背
近く並めて
おとさじおちじと
力あはす



かたみに面を
見かはしつつ
心のうちをぞ
語りあへる



うつくしき少女
それゆゑわが今

故郷にあり
死なんは惜し

家あり畑あり
それゆゑわが今

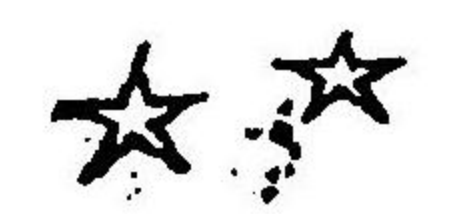
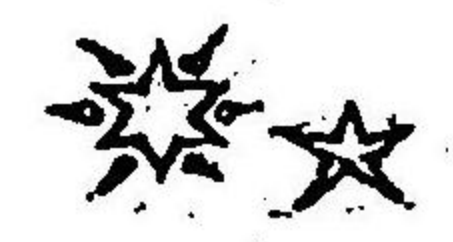
故山青し
死なんは惜し

彼岸おもひて
さはあれわが今

餘念ぞなき
死なんは惜し

みたりが上なる

雲のうちに



角鷹三つあり

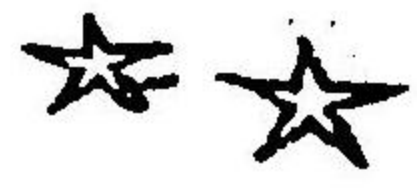
並びて飛ぶ

その鳴きかはせる
汝は彼を汝は彼を

聲音をきけば
われ此を食まん

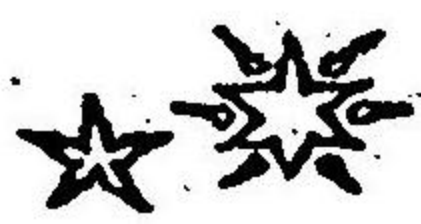
子もり歌

(PLATENS)



寐よいたづらに
何故泣くと
寐よいつかわれ
泣くべき痛を

泣くわこよ
知らずして
心より
教へてん



寐よわこよ寐よ
ながかがつらふ
父はけなげに

仇の捷
事ならず
戦ひて



死にき汝がため

わがために



つああるこそ汝を
人とならん日
されどめぐしこ
國は自由の

奴隷にと
教ふらめ
汝を生みし
ぼおらんと



まがつみこそは
我本國に
恃みし市の

うれたくも
くだりぬれ
固をも



われと我手に

毀つなり



ゆん手には春

めてに鋏



堡壘のもとに

歩みよる



をのこが群の

ささやきは



みそかに仇を

咀ふうた



ほがらにこそは

え歌はね



神よさだかに

きこしめせ



み前にいつか

召さるべき

虐つあある

にこらうす



しがしる國に

おなじくは



戦おこれ

疫病あれ



かしこにのみは

春も來で



薔薇花さけ

灰いろに



血腥き手

さし伸べば

しが妻ながら

をののきて

馴れにし聞の

とじきみを

つひに越えじと

誓ふらん

偽おほき

しが口の

たまたま強ひて

笑まんとき

胸にしがゆる

饑に泣く

孤どもの

影浮べ

榮の道を

踏みゆきて

のどに死なんと

なおもひそ

すさまじきしが

父の末

おほちの末を

かへりみよ

しが身まからば

後の世は

苦艱断えざれ

偽の

誓の指は

奥城の

土をぬきても

出づと聞く

我物なるを

我物に

しが口づから

定めてし

ものにしあるを

よこしまに

しがゆる今し

毀たれぬ



しが驕慢の
神の授けし
國を授けん
など情をも

言葉に
國といふ
神ならば
授けざる



やよめぐしわこ
恥辱の膝に
人とならん日

しばらくは
まどろみて
さめん日は



紹げかし父の

こころざし



汝生ひたたば
すさむる姿
血にあく虎の
一薙にせん

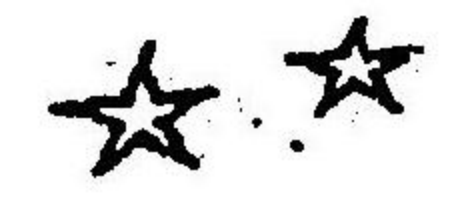
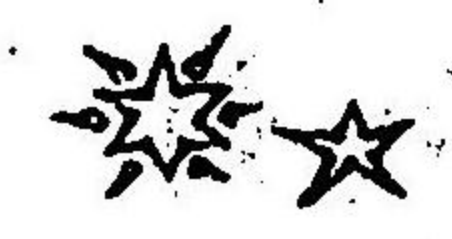
をみなごの
國のはな
掌を
劔太刀



寐よいたづらに
何故泣くと
寐よいつかわれ

泣くわこよ
知らずして
心より

泣くべき痛を
教へてん



喇叭

CHERIEGRAPHY

その口の
徒に
徒歩兵の
二中隊
毒を吐き
見てあるに
二縦隊
蹄にぞ
死を吐くを
忍びずて
砲兵の
かけてける

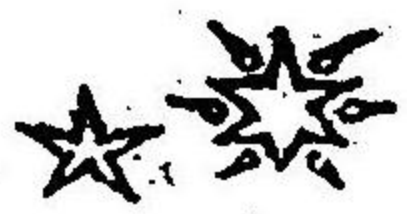
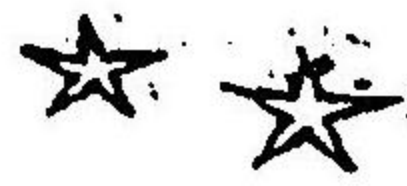
軍刀を
放ちつつ
うち揮ひ
槍低く
旗高く
甲騎兵
旆騎兵
もろ共に
轡をば

此時の

襲撃を

爲果せつ

三六四



さはれこは

鋒に

襲撃に

半こそ

血の旅路

敵こそは

加はりし

戦場に

死の旅路

靡きぬれ

二聯隊

残りしか

あるは胸

截り裂かれ

若き身を

うち抜かれ

色褪せし

草の上に

あるは額

猛き身を

横へき

喇叭手よ

集合の

曲を吹け

さて息を

進むとき

響しし

こはいかに

喇叭にぞ

勇ましき

喇叭にぞ

聲こそは

吹き入れし

その音色

吹き入れし

聞え來ね

黄銅の

響なき

弾一つ

口よりは

呻こそ

喇叭をも

悲しげに

出づるなれ

貫きぬ

三六五

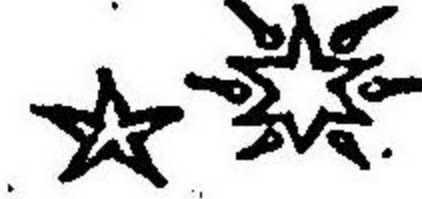




おもひけり

亡人を

亡人を



痛手をば

喇叭さへ

負ひにけり

萊茵河

まもる曲

討死の

忠義の士

威武の士を

弔すなり

傷ける

もの死せる

ものの爲

たえだえの

呻をぞ

洩らすなる

日は暮れぬ

人と馬

歸り來ぬ

めぐりには

篝火ぞ

うちけぶる

柁の馬

鼻鳴らし

雨灑ぐ

基督の木

(BLEIBFREU)



せばすとぼりの	めくりなる
攻圍軍據る	塹壕に
獨逸傭兵	屯せり
耶蘇降誕の	祭の夜
うから見棄てし	人の子も
家をぞおもふ	いと切に
せばすとぼりの	塹壕に



光の海ぞ	かがやける
好きのえつと	あたの撃つ
丸は散と	ふりそそぐ
さはれ怯れぬ	つはものは
夢見心地に	ほほるめり
蠟燭あまた	點したる
ふるき習の	常盤木の
小枝ゆひびく	こもり歌
沙はら燃ゆる	あるじえりや

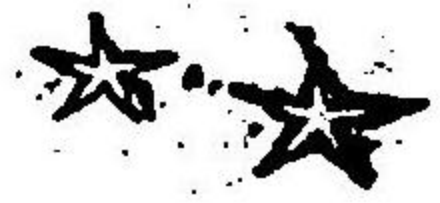
その火にやけし 片頬にも
しるや涙の したたりを

あらくれをのこ をさなくて
母のたばさん たまものを
待ちし今宵を わすれぬよ
耳にひびくは ときは木の
枝ふくかぜの そよめきか
父のをしへの ことのはか

わが本國の ためならば
などが命の をしからん
衣食のための 死ぞ苦き
しじに飛び来る あたの丸
わすれて仰ぐ 西のそら
鉛を胸に 果てにけり

鼓手

(MOERIKES)



母魔女ならば 聯隊の
ゆくさきさきさきの 人國へ
來ましを酒保の 物賣りに



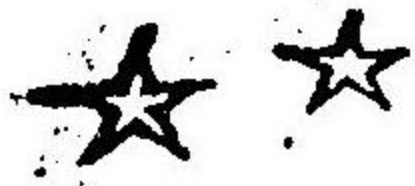
さらば歩哨の 外なべて
人馬みな寐る 陣の夜を
鼓を前に あかさんを



劍は腸づめ 鼓皿
桴はふおおくと ないふとよ
帽は盞 酒血しほ



燈なけれど 月はさす
人國にさす 月にさへ
偲ぶわが母 魔女ならば



みづうみ

(FIELD)



みづうみに添ふ

絲柳

いは波にぞ

なづさへる

黄金の髪

をとめ子よ

舟なめゆくも

けふかぎり

そよぐ柳の

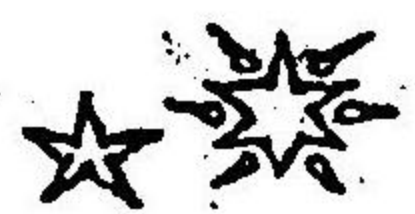
木のもとを

いまひとたびと

漕ぎめぐる

ふたりの胸に

まじるらん



甘き睦と

かなしびと

舟漕ぎ開き

帽ふれば

立つさざ波は

ささやきぬ

血をや流さん

君がため

さらば少女

いざさらば



ひととせの後

遠き野に

つはものの墓

ひとつあり

枝を垂れたる

瘤やなき

そよげば遠く

ささやきを





風ふきおくる 湖に
われ野に眠れり 少女子よ

みづうみに添ふ いと柳

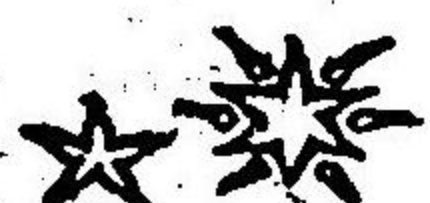
いとは波にぞ なづさへる

波間ほのかに かがやくは

玉より白き 額ぎは

波のささやき おぼつかな

汝が髪あらはん をとめ子よ



金鼓 (KINENCRON)

行軍に 敬禮に はた進撃に
つね聞馴れし 金鼓のひびき

追ひすがり 行かんにも 義足たとたと
金鼓ひびけど たもとほる今

ゆきなやむ 身おもへば 聞え來んとき
耳おほふべき 金鼓の響



聞く甲斐はあらねども 世にあるかぎり
 金鼓よひびけ 陛下萬歳



一夜のやど (STRODMANN)

はてにけり せだんのいくさ
 塵と飛ぶ 帝王の御座
 軍はなほ 進みてやまず
 夜あらしの ふきあるること
 あるだんぬ はやくも過ぎつ
 寺名ある 市もよぎりぬ
 喉かわき 足なうらは燃ゆ

山川も ゆくてささへず



あつき日の 葡萄島を

岩にそひ のぼりてぞゆく

あな奇しき さかひに來しよ

日かたぶき 宿かるころに



木立ある 山のいただき

城ありて 月の野に俯す

岩まより おちたぎつ水



流れ入る まるぬの川に

世はなれし 此仙境に

けがれ沓 いれんことをし

自然てふ 母のふところ

たひらぎの 夢をぞさそふ



山隈に 人のつくれる

樂園の かりのやとりに

楡の葉の そよぎを聞けば



たたかひを ちばしわすれつ



ひとりだに 音にはたてねど

胸にみつ しじまの訴

問はまほし 人道の春

いつの日か うつつに來べき



そのときは 妬も忌も

うき雲の 消えてあとなく

いくさせず 血しほながさず



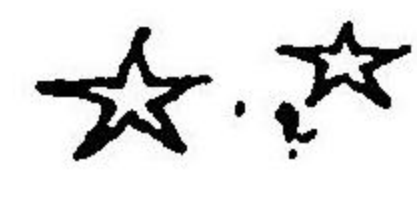
國々は むつびに生きん

うるはしき 仙境のゆめ

夜あくれば やがてぞ醒めし

縦隊は はやつくられぬ

いざ進め あたの都へ



夢がたり

しれじれし 夢みるひとの ゆめがたり
中に悲劇の いとどふさはぬ



夢

わが夢の

汝いかで

阿古屋貝

汝が夢の

ともすれば

清冷の

曠野には

いでて見ん

藏せる珠

樂園に

われゆかん

淵なる魚

やさしき汝が

夢のかぎり

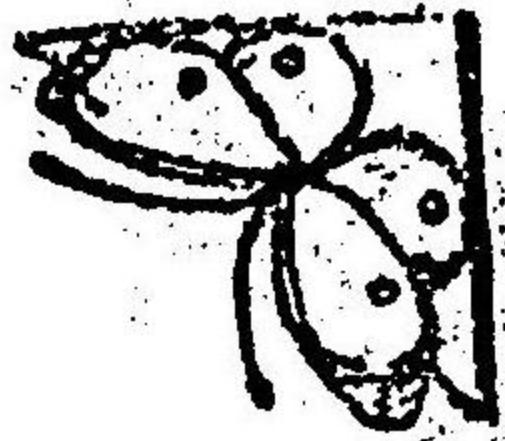


われ問はずして知る
 草を縫ふ 谷間の清水
 極にこもる 小琴のさや音
 忌々しきわが 夢のきはみ
 汝は問はずもあれ
 鳥落つる 高嶺鳴澤
 機絶ゆる 荒海渦潮

蟋蟀

まどかなる 穴掘りて栖む
 きりぎりす おちなき蟲よ
 觸角を 長くさし伸べ
 物來れば しざりかくろふ
 隠處の 曉長き子
 人來れば かくろへ入りて
 我を待ち居り





風と水と

あひ見し 後のあした
日あかく 風こちよき
かとべに われ立ちて
しりへを ふりかへり見つ

とみれば 門のうち
上下 水みちみちて
おん身の 襲のきぬの



紫

ただよひうかぶ

たとへば いろくづの
むろなる 玻璃をへだてて
ひと魚 あひ見つつ
異しとも おもはぬごとし

さすがに きぬぎぬの
まだきの わかれをしみて
またの日 とく來ませと



媚びてぞ おん身ささやく

宜こそ 風の世に

来んとは いはざりけれと

うなづく われを見て

おん身は 微笑み立てり



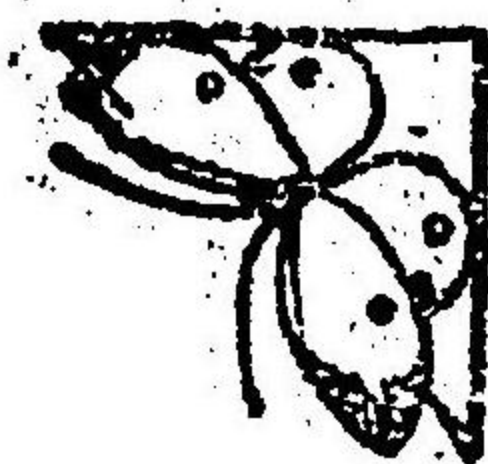
うさ我を ささはふものは 昔蓍の

四葉にあらで 君がたまづさ



藤王の 筆か彩羽の 蝶の繪に
夢にあはんと かきおこせつる

まばらなる 鬢を秋風 ふく頃を



若^{わか}ゆと夢^{ゆめ}に 君^{きみ}は見^みつとや

契^{ちぎり}あれや 百^{ひゃく}重^へかさなる 海^{うみ}山^{やま}を
中^{なか}にへだてて ゆめにあひみし

あととめて 御^み魂^{たま}や來^きぬる 我^{わが}魂^{たま}や
あこがれゆきし 夢^{ゆめ}のかよひ路^ぢ

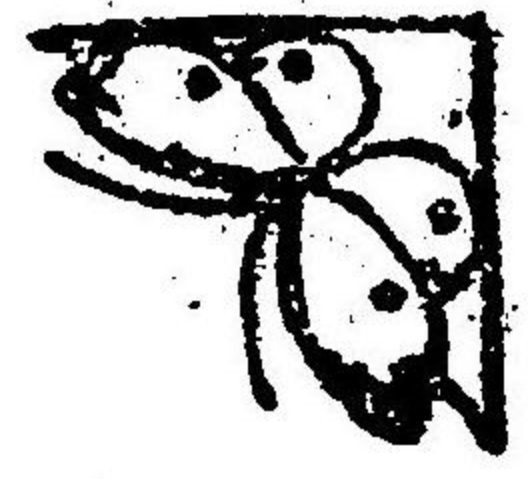
あひみきと 見^みえけん夢^{ゆめ}の 何^{なに}しかも
我^{わが}には見^みえぬ 戀^{こひ}ひつつあるを

わが跡^{あと}を ふみもとめても 來^こんといふ
遠^{とほ}孀^{づよ}あるを 誰^{たれ}とかは寢^いん

つるばみの なれし一^{ひと}重^への 衣^{きぬ}の上に
かさねん衣^{きぬ}は あらじとぞおもふ

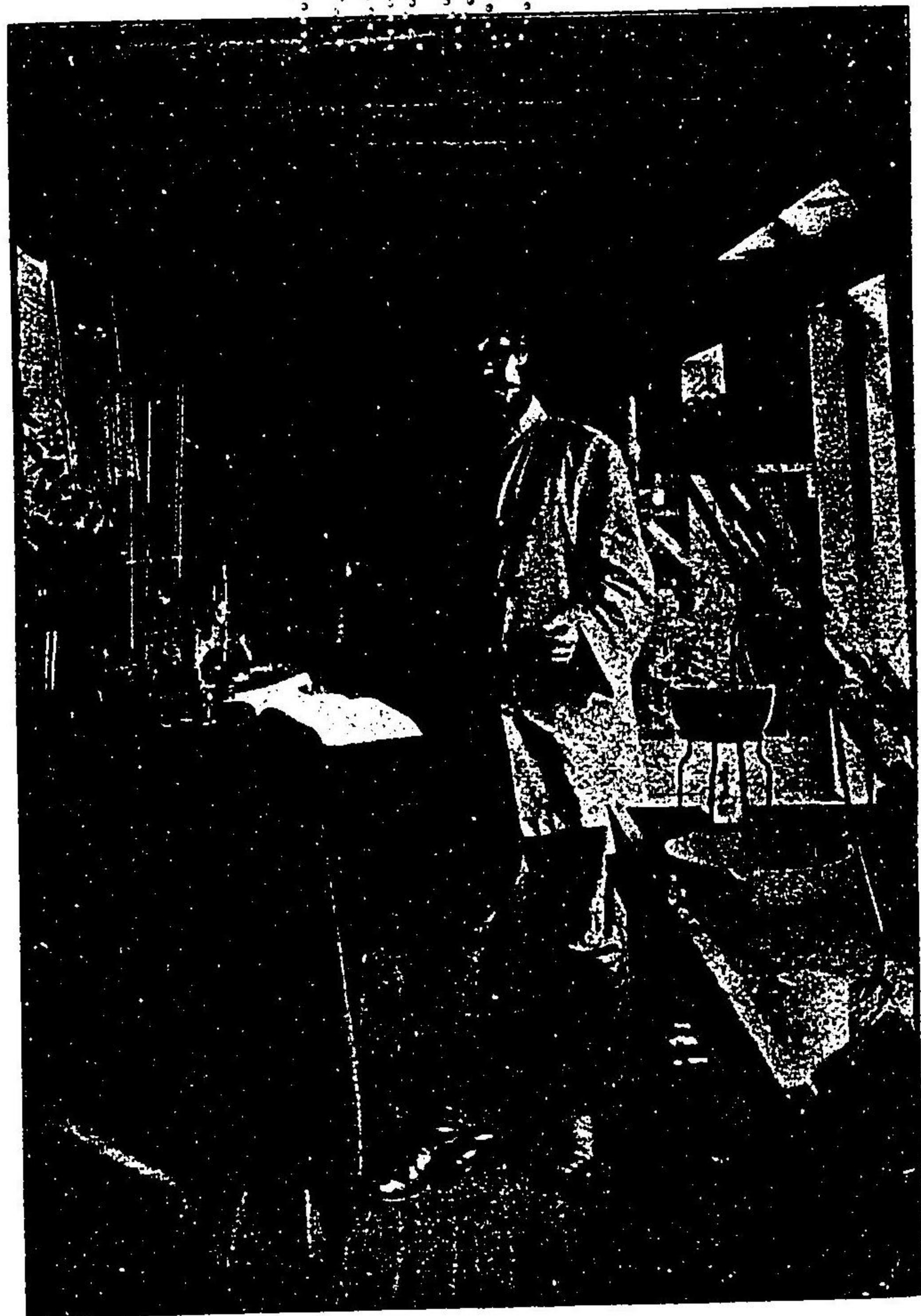


.....
.....
.....



わけいりし 文あの林はやしの おくかにも
こひわすれ草くさ おふる見みざりき

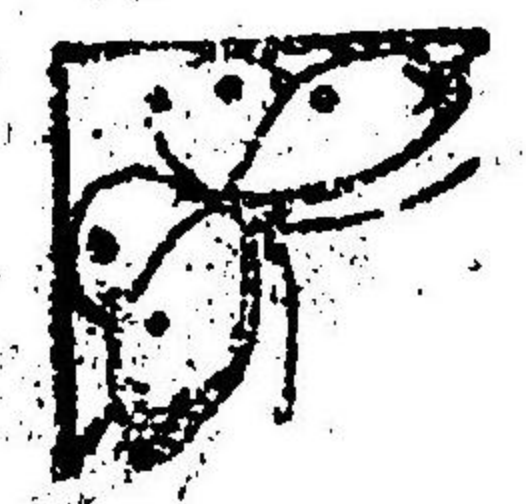
つばくらに 宿やどをまかせて えみしらが
まつろはんまで われは歸かへらじ

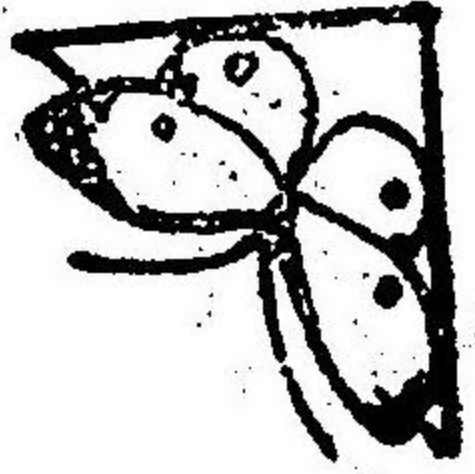


見んひとの なげきをしらぬ 肖像師の
さながら肖せつ 身のやつれさへ

おもかげや さしもかはれる 七世經し
うまごにあらぬ 子すらみしらず

二人子の すむ二家の いづれにか
いなんと夢に まよひけるかな





わが墓

わが歩む
人あまた

道のゆくてに
穴ほりてをり

地にひ泉
地の質

もとむるならじ
きはむるならじ

穴の上を

覆面の人

馳せめぐり

罵りはげます

たもとほり
穴は我

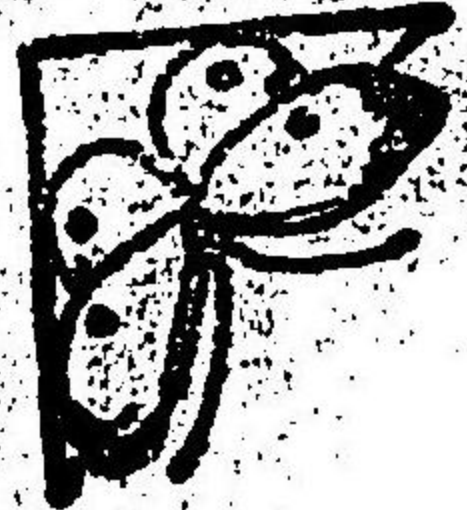
見つつわれおもふ
墓ならじかと

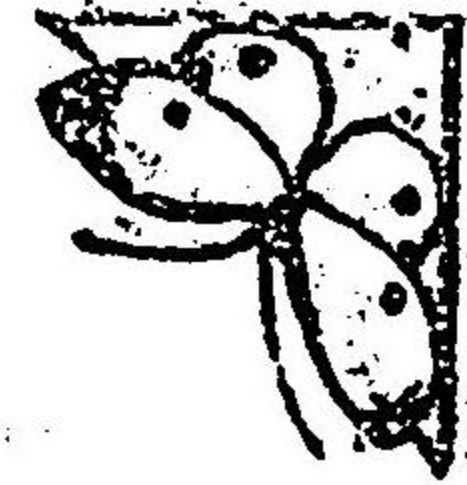
入らでやは
われ道に

わが墓ならば
倦むこと久し

罵る人よ
いざ握れ

覆面とりて
感謝の右手を



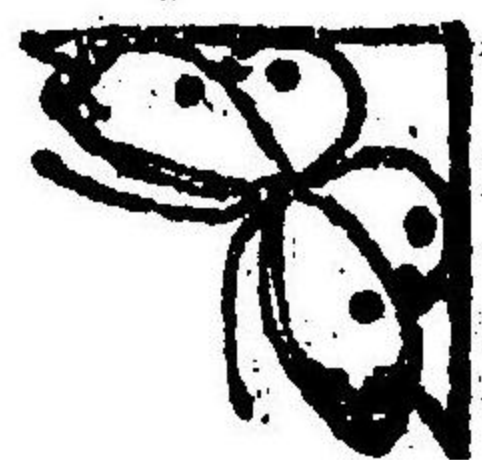


花園はなその

さく花は 猩猩緋
色の濃きかな
葉の肉の つややかに
肥えにたるかな
園のぬし そもや誰そ
花さけと よの常の
はなとな見そね



葉しげれと よの常の
はとなおもひそ
主に魔の 力あり
さく花ぞ 顔ばせの
我血なりける
肥ゆる葉ぞ 我肌の
膏なりける
あなかしこ 世に秘めよ



闇に花

毒を吐く

夜々の魔

葉をいでし 蛇集く

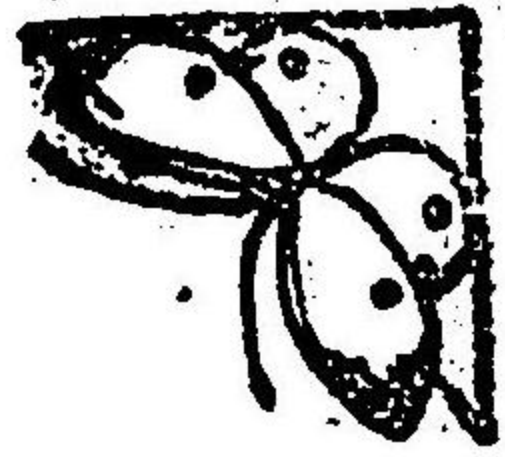
きたましの牀

あなかしこ 世に秘めよ



おほからん 我罪せむる ことの葉を
聞かばたふとき 教とおもはん

さもあらばあれ いかなる人か 罪なくて
はじめの石を 我になげうつ



世の榮に けたれぬべくは 磨きつる
心のひかり かひなかるらん

たつきあらば 近き虚言 きく人に
遠きまことを しらせてしかな

みまほしき たまづさをだに 今ゆのち
見じと誓ふは くるしかりけり

蛇噬まば 腕もたたん ますらをの
衣ひとへを ぬがざらめやは

古小瓶 黄金の莖の 露をしも
承けば承けなん ものにやはあらぬ





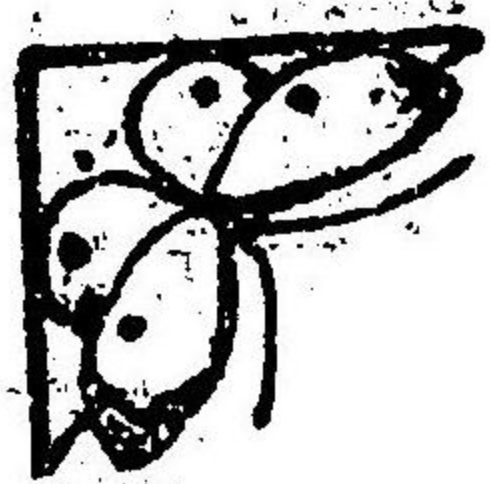
鉢植の 一尺小松 雲きはに
 聳り立てりと ゆめみけるかな

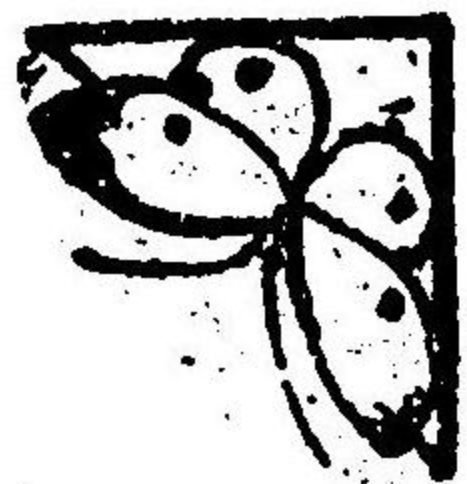
かなとこに 身をばおきてん 鍛ひ打つ
 かちが手力 おとろふるまで

傲なり 千とせの雪を 足蹠に
 踏みつつ霧の こむるわぶるは

榮の子 ちばしと呼べと いさよはぬ
 時のあゆみの おほいなるかな

心せよと 谷間ゆよべと 巖の
 まばゆき際に きこえざるらん





黍稷に露おくよはを 月に寝て
帷幄の人のよわきわらひぬ

世の中の戀てふことや 忘れけん
待たねば來ねと なげかずなりぬ

萬世のそれも絆と 棄ててまし
ひと時の名よ きみがまにまに

もとめわびて 世人悩むと 知るからに
譽てふもの 憎しとおもひぬ

もる人はあれと甲斐なし 天地の
めぐみにそだて 園のわかくさ

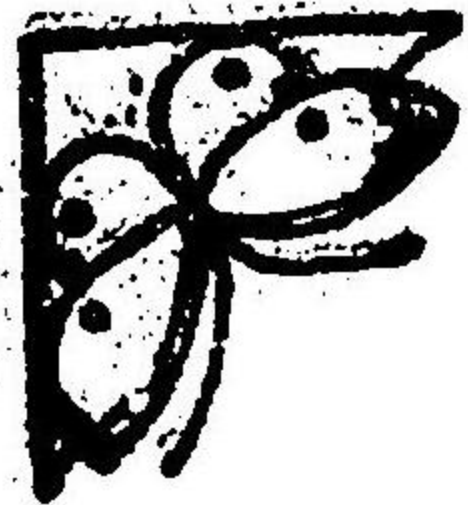




水無月のしをるる苗にひく水の
あまり遠きをわぶる頃かな

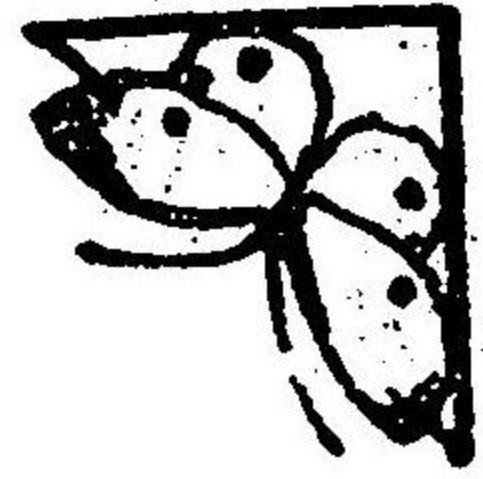
月にこそ日にこそ蝕のあらばあらめ
星よなど虧けなど地に隕つる

笑



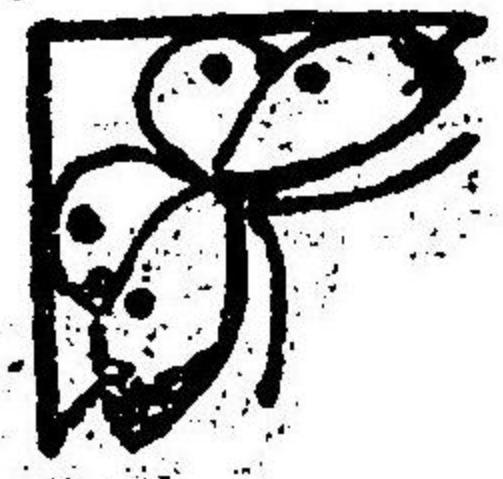
われその巷に
愛犬ゆくてを
われその扉を
大喙のからす
われその垣内に
木の間ゆ舌吐く
われその堂宇に
僮僕ゆるなく

ちかづくとき
遮り吠ゆ
排するとき
簷端になく
たたずむとき
蛇うかがふ
のぼれるとき
目もてかたる



われその幌を
鳴呼われその幌を
面上猶認む

擧ぐるとき
擧ぐるとき
往時の笑



火の征箭を 射る日のもとに うなだれぬ
一人に眠 やすからずとか

いばらおろす 柔手はなしや 桂とは
かねておもひも かけぬ額より



血よけぶれ 額はさながら 牲卓
 棘おろさん やは手たのまじ

四二二

いぎたなき 十二の徒弟 よべどよべど
 さめざりし夜の ひとりをぞおもふ

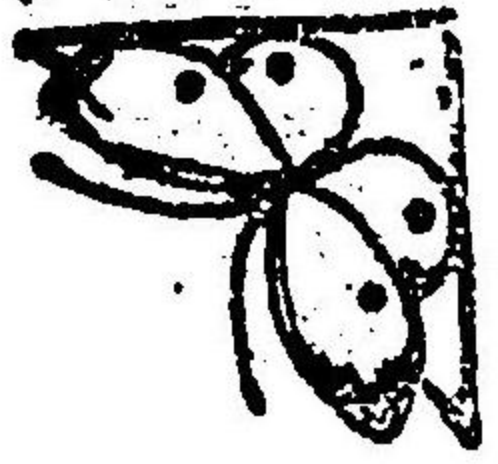
怖づべきかな 筋絶つ劔 目にみえず
 髓枯らす毒 はかりにのらぬ

鳩のさけ こぼして仰ぐ 五月空
 君もさきつや はつほととぎす

あこがれよ しぬびよつひの 旅路には
 つきななき重荷 いざおろしてん



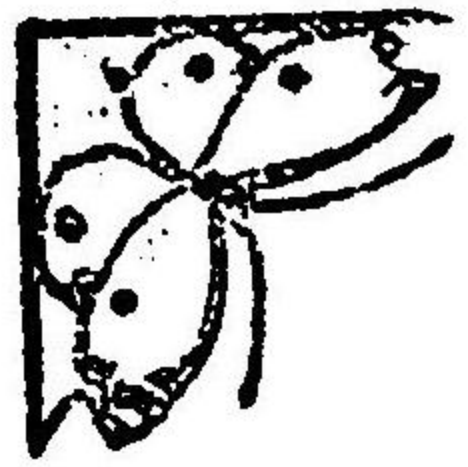
四二三



薬もて 淬ちつる 双 鳩の酒
よきて 護りし いのちいざめせ

いざや火を 薪にうつせ 血ぬられし
悶の肌衣 きつつ焚かれん

屍より 笞のもとの ほほゑみの
毒ある花と おひいでん見よ



濁世いむ 天の使よ 眠る子の
目に口つけて 死にみちびけ

めふさきるさ

塵塚ちりづかに ちる文売なまの きれぎれに
名なあてなければ 名なだてもあらし



ながき日を病める維摩の室の外に
 天つ花とや梅のちるらん(病める僧に)

君が住む春山しなひ さく花の
 一瓣一瓣にちとせこもれり(春の頃山住せる人の賀に)

まつ春の まだ來ぬ國に われをれば



花の一瓣も はしきたまもの (友の櫻の花びらおこせしに)

四一八

君がうるし 花にしあるを うれたきや
醜のえみしぞ ぬきてすてける (なにがしの元帥の君に)

八衢の道はあれども 橋の
蔭をし踏まば まよはさらまし (橋岡太が傳に)

書まつらん 櫻紅の露に べにとまて (櫻紅といふ小
既なものをせし少女に)

さちかうや 紫帽子 あねいもと (實子扶伎子の繪葉書
なせし友に)



四一九



香積の飯おほく食へ 秋ことし(病後の所に)

四二〇

夜は長し 子等はさらなり 見まほしき
人の限を みる夢もがな(菜の刀自にかへし)

うた匠 君月なれや さかしらの
世のあらそひを よそにすみませす(早く戦地より歸りし友に)

白楊の黄ばみし圓葉 風に舞ふ
中に立てりと おもかげに見よ(戦地にある様想ひ浮べ
しといひおこせし友に)

柚人は 甲山と號す 雪の柚(夢は楡城の尻に駭き思は陸奥
の雪に映す)



冬籠 冬休父子 閑話かな (學年試験をはりし友に)

冬籠 名のわづらひを 忘れませ (新聞にて攻撃せらるる友に)

冬ごもり つくづく女を 恐れけり (友なる某に)



火桶抱いて 淺間の山を 夢みけり (宿遠なる友に)

屹として 動かぬ火事の 纏かな (友の火事の詩を寄せ示ししと某に)

従容と 火事を立退く 名妓哉



燒迹やきあとや 忽然とつぜんとして かへり花はな
(火後再刊せし雑誌を寄せし友に二)

春隣はるごころ 火ひを賀がする文ぶんを 草くさしけり

城しろのうへに 立ちて嘯うたけ さちはこの
黄金こがねの鱗うろこ みな動くべく(戦地より名古屋に歸る友に)

君きみがゆく 眞砂まなご白濱しろはま はま松まつの 下したゆくみちは
たれとゆく道みち(相模の海邊にある友に)

陸奥むつの あたたらまゆみ ひきしぼり
あばし放はなたぬ きみをしぞおもふ(陸奥に一年をすぐさ





んといふ友に)

君きみに問とふ 戀こひの 偲しのの 係か慕がの くしき薬くすりは
いまだなしやと(藥いちりすといひおこせし友に)

賂まなしに あけん薬くすりの 筐はならじ

いでや盗ぬみに 嫦じやう娥がを遣つらん(同じ人薬はあれど匂遣らんを

恐れて彼なえ開かじといひおこせけるがへし二首)

筐かごのうちに 戀こひの 薬くすりの まことあらば
冠かぶゆづる 王わうもやあるべき

清きき上うに きよき求もとめて かみつ瀬せの
水みづ汲くみぬてふ ひとぞゆかしき(或ひとの茶によき水汲む

と興津川に湖りした聞きて)





國民は 皆をしへ子と かがふりを
掛けて去にけん きみをしぞおもふ (教員をやめし友に)

闇にきん 錦あやなし 心こそ 夜光る玉に
なさはなりなめ (錦きずて郷にのへるが心苦しと歎きおこせし友に)

たどり來し 闇うすれゆく 曙の

町にもわれを 待つところそいへ (晴町の刀自の凱旋を待つ
といひおこせし友に)

くろがねの 躑は足を 絆すとも
目にあまつ日を あふげとぞおもふ (冤屈の友に)

な渡りそ 渡りぬ墮ちぬ 息絶えぬ
惜しとねになく 篋後の七いと (某の溺死せしとき)





簷のきにすくふ 鳩はとの子七ななつ 七ななつの子
 鳴なげばしのばゆ ななたりの友とも（七人のひとりじ）

歌うたぬしの 飛とばまくは後のち 歌うた卷まきは
 今いましとばなん 羽はねはあらずとも（友の集に二首）

ぬば玉たまの 夜よ光ひかりるとふ 眞ま白しろ玉たま
 世よにしらえずて あにやまめやも

野のに栖すめば うらやましさよ 耳みみただに
 海うみの潮うしほの おと聞きくひとの（海潮音を讀むといふ友に）





まへの夜

(同志の友十人足らず詩の狩鏡せんとすと告げおこせし少年に)

ゆらくなり

油火風に

弦はぐ丸屋

足らねと材の

十張には

荒雄の明日を

六つ選りし弓

狩くらの

神夢に泣き

岫ぬちの

闇に木精の

夜ただこたふる

ふりぬれば 世はすさめねと これぞこの
道のさかりの 千歌はたまき(古今集袖珍本をおくり





おこせし菜の刀白じ

春川の 日景にはえて さらさらと
網をすべりし 白魚やこれ(友の白魚をこせしに)



たまものの 三くさをそへて
旨からぬ 飯もたうべん
なつかしき これの三種に
痩せにたる 身さへ肥えなん
古里の 山の葉わさび
ふるさとの 海のからさみ
海のこのわた

みつかひは もろ手に提げて 來ぬるかな



故郷の山

ふるさとの海

(父の山葵唐墨海風情をおこせしに)

四三六

無名草

かきそふる

詠人しらぬ

歌幾首

しとなき序

われと笑まれぬ

寫眞

春とはいへど

沫雪の

いまだふりしく

頃なりき

かしこき勅

かがふりて

うつくし夫は

いでましぬ

むなしく跡に

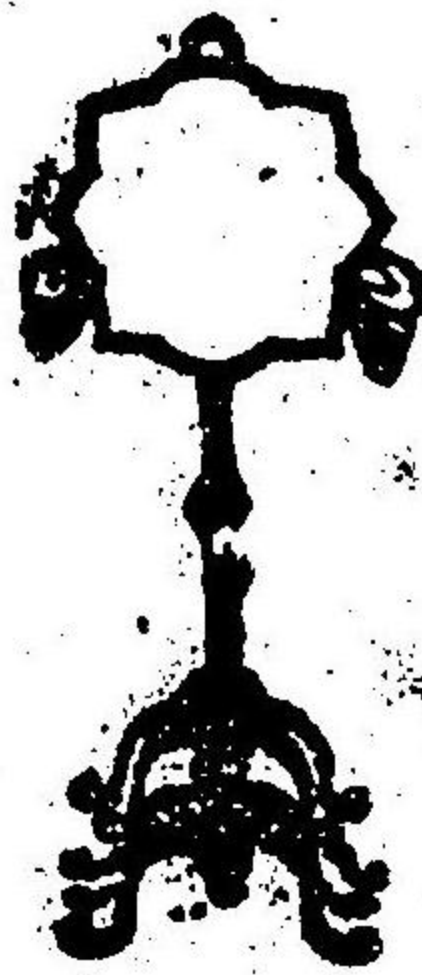
おくれるて

生けりともなき

身にも猶

君をしぬばん

形見なる



まなごあるこそうれしけれ

乳ばなれてより 二三月

たどたとしくも 立ち歩み

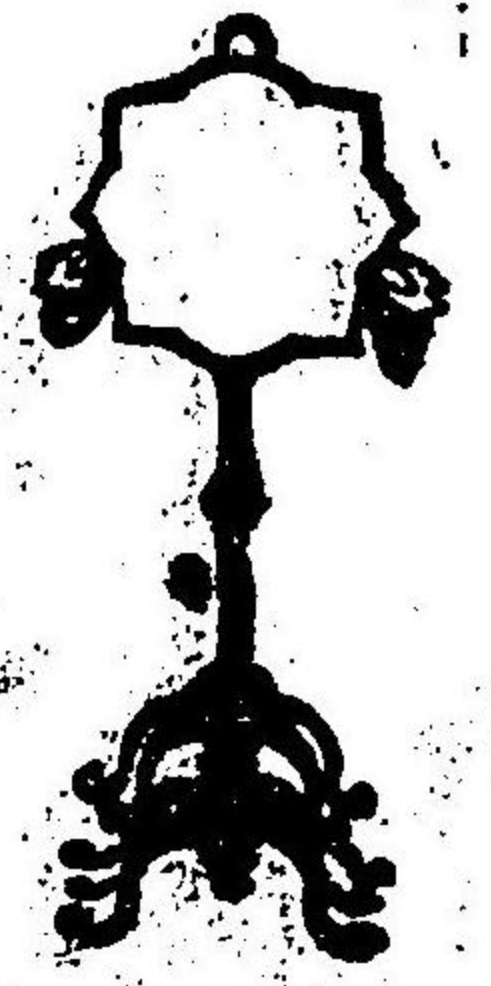
父よ母よと かたなりに

いひならひたる めぐしさよ

父のおもわな 忘れそと

文庫にひめし み寫眞を

とざし開きて とうでつつ



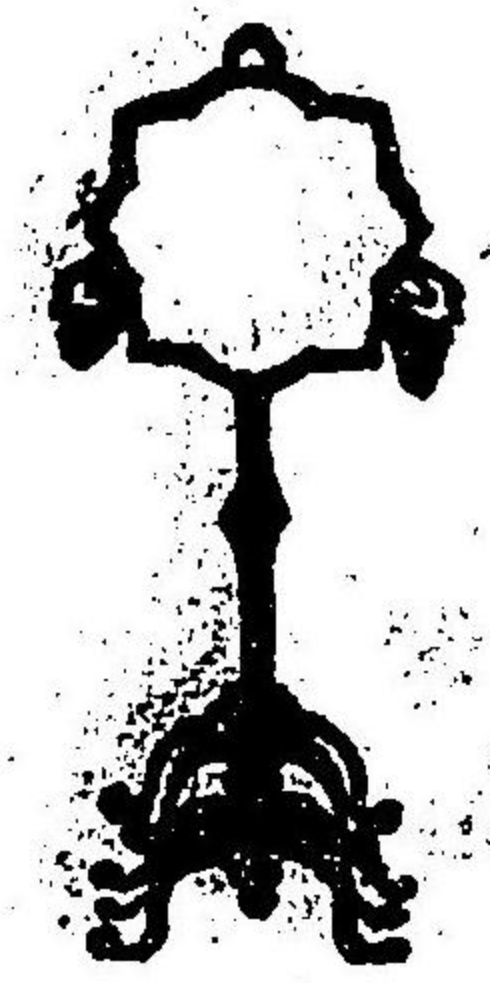
まなごに見せつ よろづ度

かくていつしか 五月雨の

いぶせき空と なりにけり

掃はぬ部屋に ひきちらす

追送の衣 二つ三つ



あはれ此頃 陣營の

月日のうさは いかにと

おもへば鍼の 手も懈く

涙はおちぬ

衣の上

その時ひとり

文机の

抽斗あさり

遊びあし

ちこの聲して

ゆくりかに

父よ父よと

よばふなり

なぞと見やれば

抽斗に

ありけん鑰を

てつつにも

母の文庫に

おしあてて



又も父よと

呼びにけり

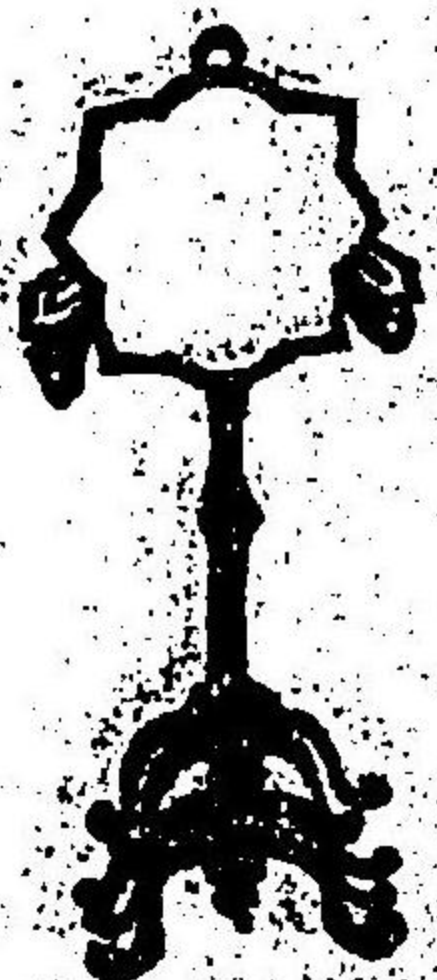


いくたびか 君いますかと 書室の
遺戸の引手 引かんとはせし

いたづらに 張るや十三 琴のいと
心くだけで 聲の諧はぬ



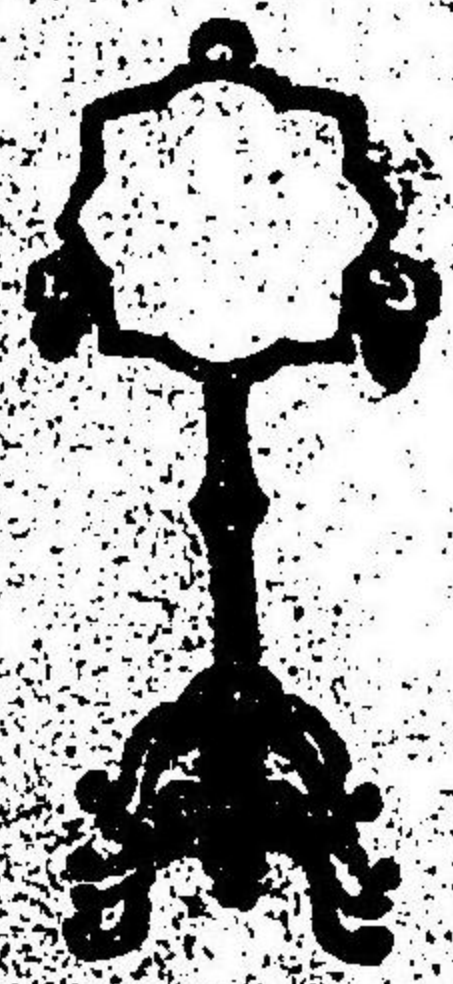
我まもる 木蔭夕闇 人の目に
なにか見ゆべき な問ひそ御許



おもふこと 盡きぬ夜長を 心なの
枕どけいよ はたととまりぬ

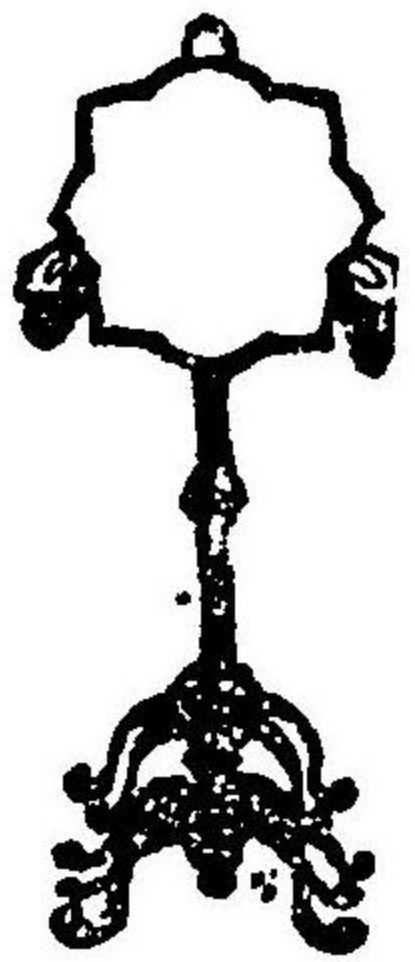
よもすがら 寐息おだしく ともすれば
夢にほはるむ 子をうらやみぬ

ともしびの 常はありとも おもはぬを
一人しをれば あたしまれつつ





ねよわがこ



ねよわが子 なれは好き子ぞ ねよわが子
 夜明けなば なれにとらせん 好きものを
 好きものは 人形にんぎょうやよき 毬まりやよき

ねよわが子 なれは好き子ぞ ねよわが子
 おひ立たば なれを添そはせん 好き人に
 好き人は よしとよく見みて 定まめてん

ねよわが子

ねよわが子 なれは好き子ぞ

ねよわが子

夜明けなば なれにとらせん

好きものを

好きものは 人形やよき

毬やよき

ねよわが子 なれは好き子ぞ

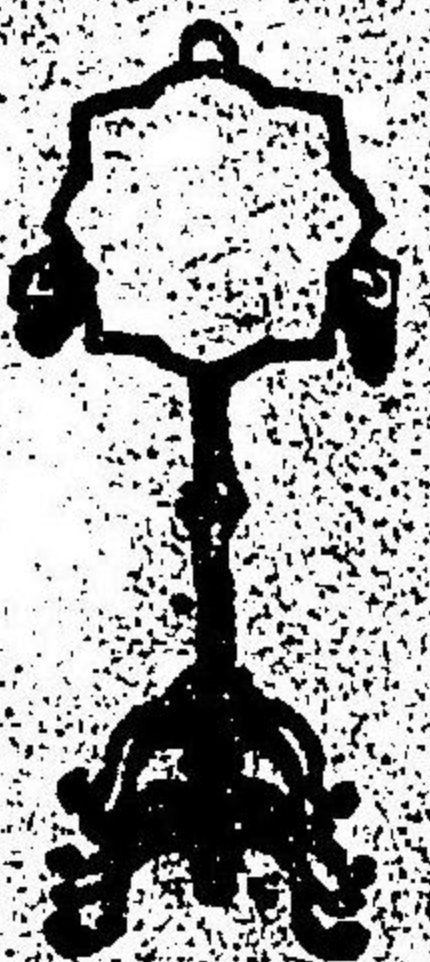
ねよわが子

おひ立たば なれを添はせん

好き人に

好き人は よしとよく見て

定めてん



ねよわが子 なれはよき子ぞ
ねよわが子 年ひきに
なが背子は 家をな離り
なが世には 戦なかれ
世のなかに

ねよわが子 なれは好き子ぞ
ねよわが子
夜明けなば なれにとらせん
好きものを
おひ立たば なれを添はせん
好き人に



ゆくりかに 胸こそさわげ 何處ゆか
はばなの香する 君もあらなくに

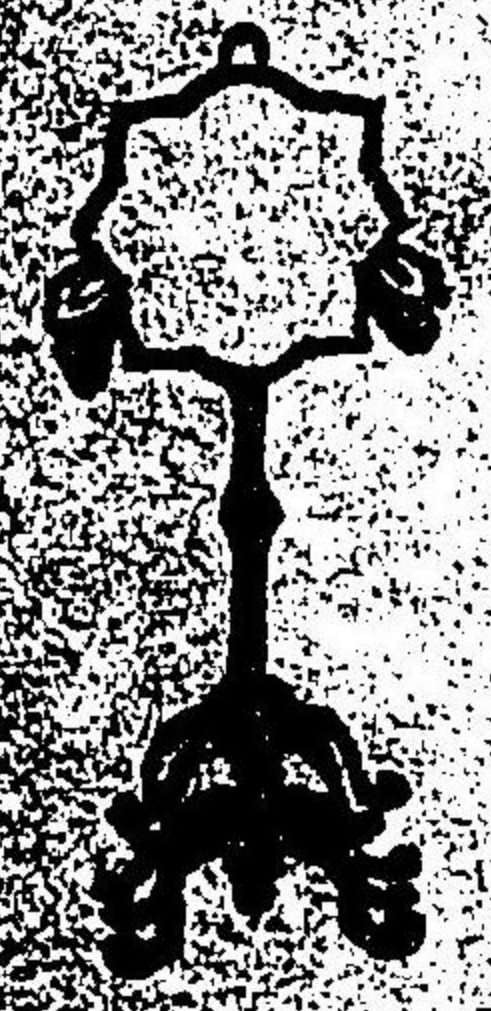


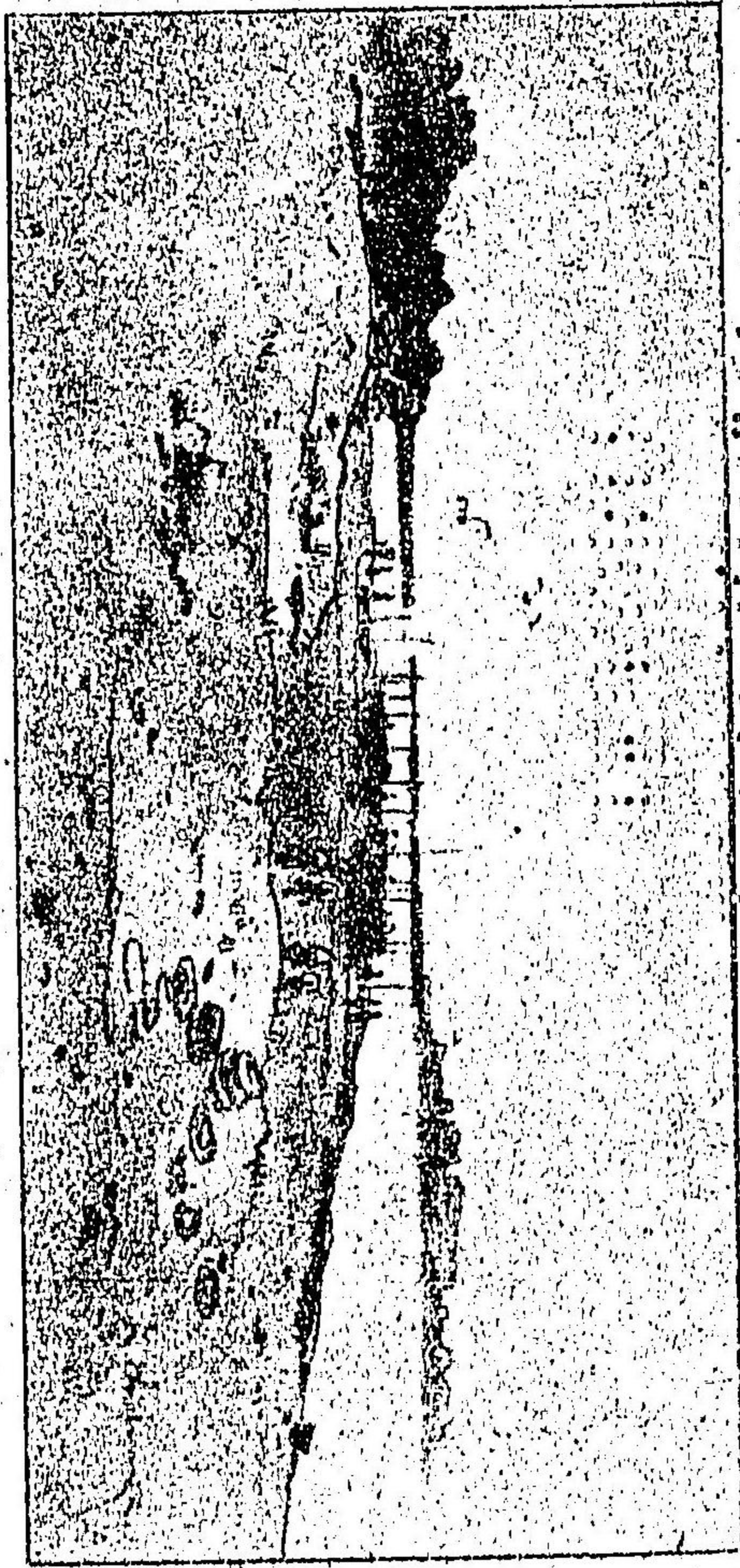
海路ゆく つはものならば 吾背子も
ふなぎよめすと かへり来ましを

四四八
むしる葉の
歸りまさん かへりまさじと
およびの尖に ふるひたるかな

いたづらに 夕とどろく 虎の門
吾背の乗らす あをうまの來ぬ

君來ぬにいつ迄なれぬ 我胸ぞ
門の戸あけは 誰そやとさわく

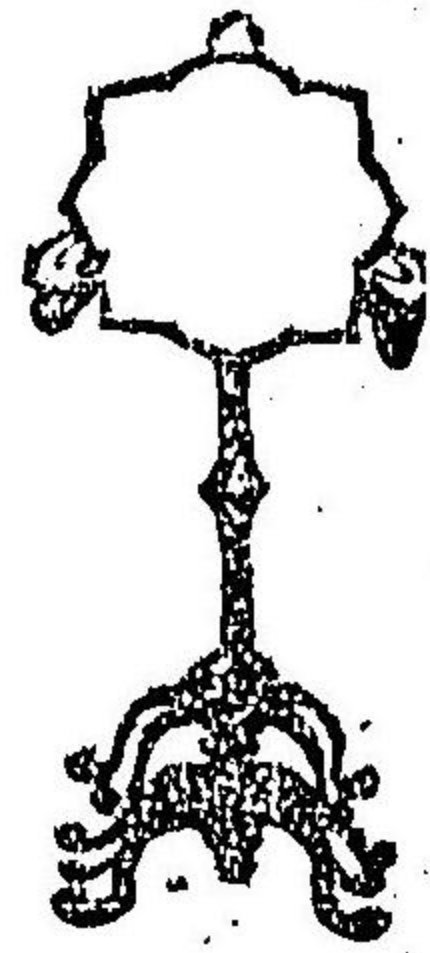




えのしま

手をたづさはり	むつびつつ
清き白濱	とめくれば
苔みどりなる	いはむろに
波打寄せて	砕け散る

あないぶかしや	吾背子は
いくさのにはに	ましますを
などえのしまに	來まししと



おもへば夢は

さめにけり

火影さびしき

閨のうち

おもひいつれば

むかしより

このみ祠に

めをとじて

詣つな努と

いふぞとよ

ながき別と

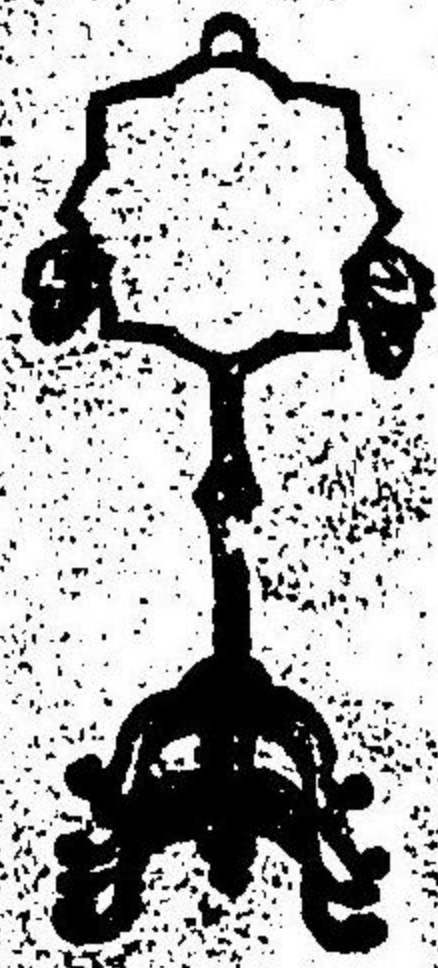
なりぬべき

識にもやと

まとはれて

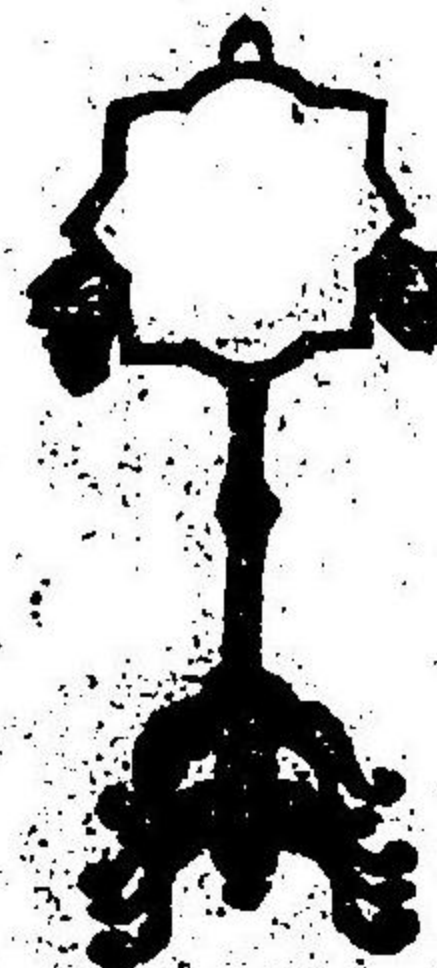
もも筋千筋

絶間なく



涙はおちぬ

枕邊に

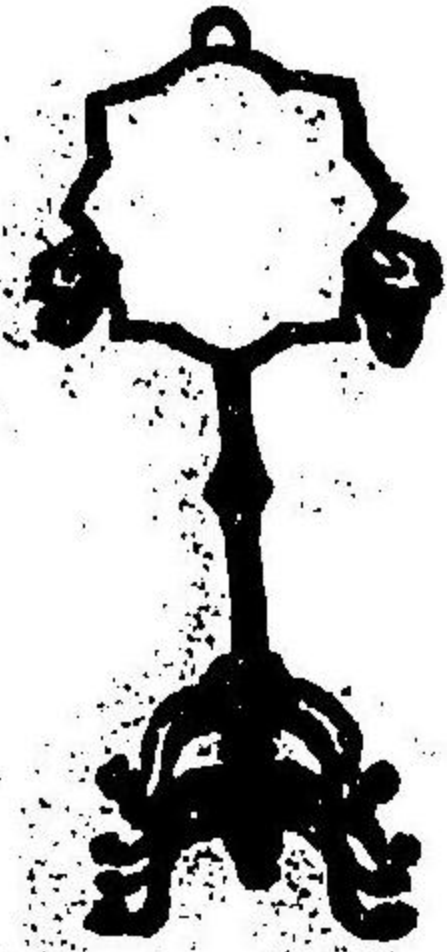


ふみ

はじめて讀めば
ふみのうちゆ
みこるさやかに
ひびくなり

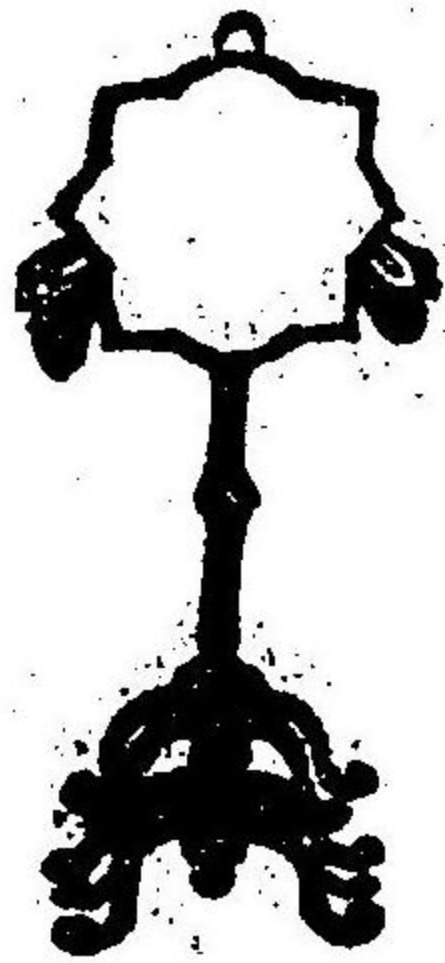
ただに相見る
こちして
われとるまふを
人や見し

ふたたび三度
くりかへし
讀めばみ聲は
絶えにけり



いづくゆか吹く
我夏瘦の

秋の風
肌に染む



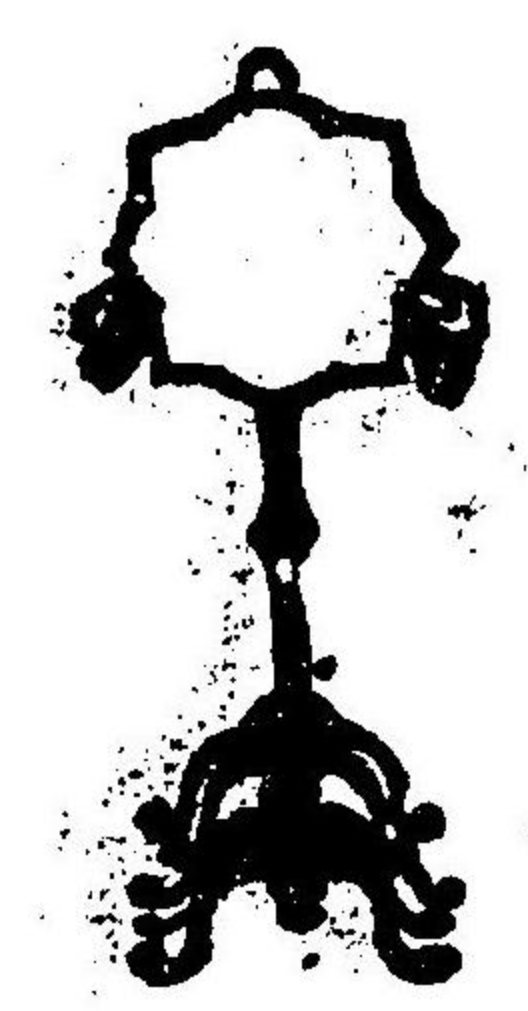
君が手に いたらんやいなや 寄する衣
西風そよぎ 玉蘭うれふ

錦織る 才なき妻が 編む糸の
千筋のおもひ あはれとおぼせ

まゐらする 肖像ひとひら
よく見ませ はじめて君に
逢ひしよそほひ

ならびゐて 語りし園の 榻のうへに
山茶花こぼれ 日のうすれゆく

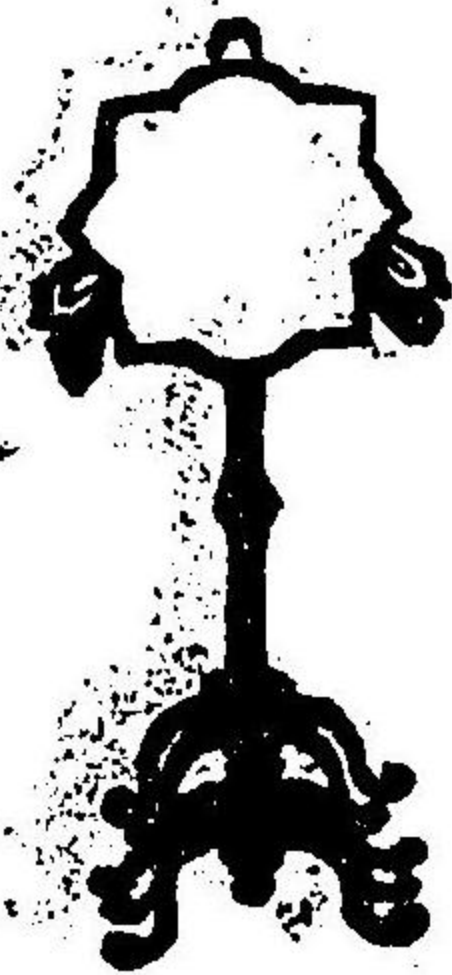
妬むひと あらぬを幸と たづねえし



書にや君が 耽りますらん

おなじ心 ひとつ身なれや さかりゐて
君病みましし わがやみしとき

聞せばや 父母とだに さだかには
いはざりし子の 歌うたふこゑ



しこのるすきい

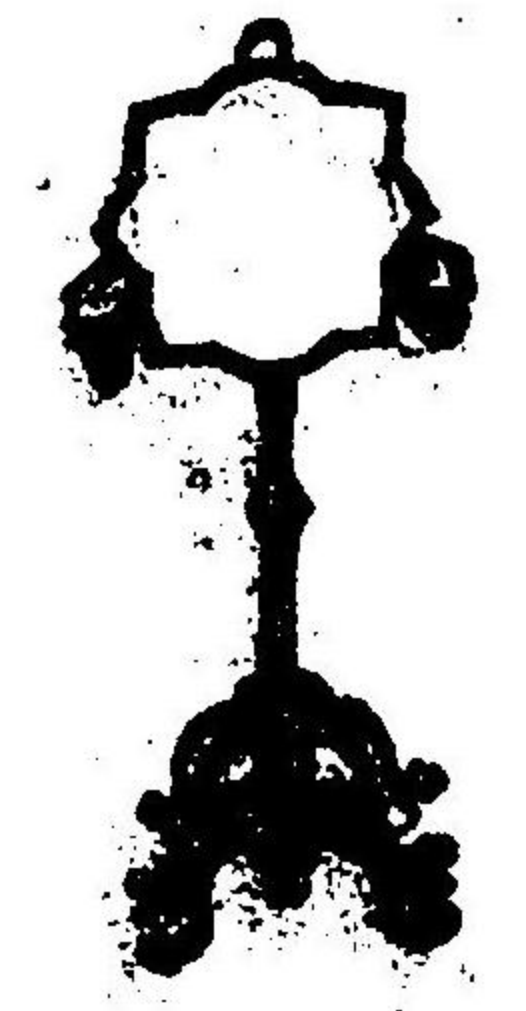
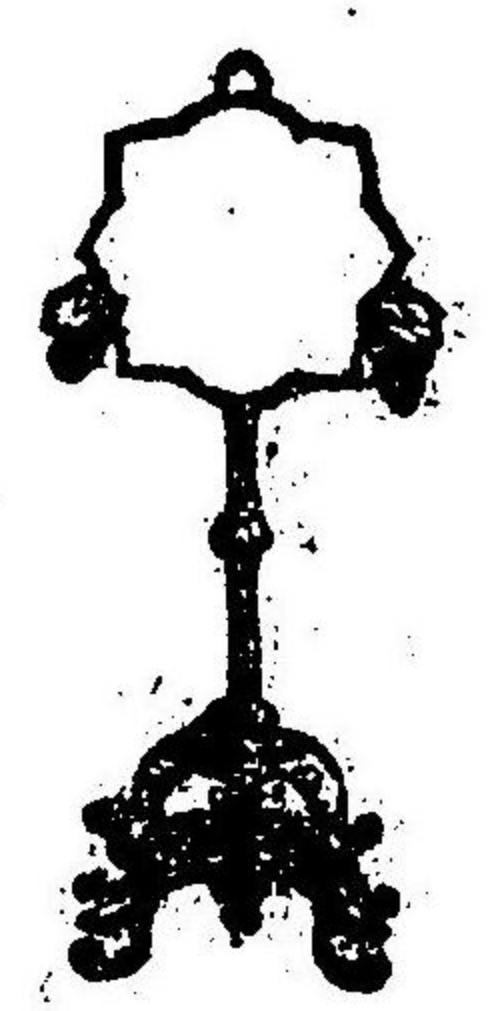


待つことを かなしきものと
君ゆるに しりそめし頃
ふつかみか 離りゐてだに
玉の緒の いまか絶ゆると
こひ歎く 習なりしを
みいくさに ゆきまししより
ひととせの 月日は過ぎぬ
空蟬の 世のことわりは

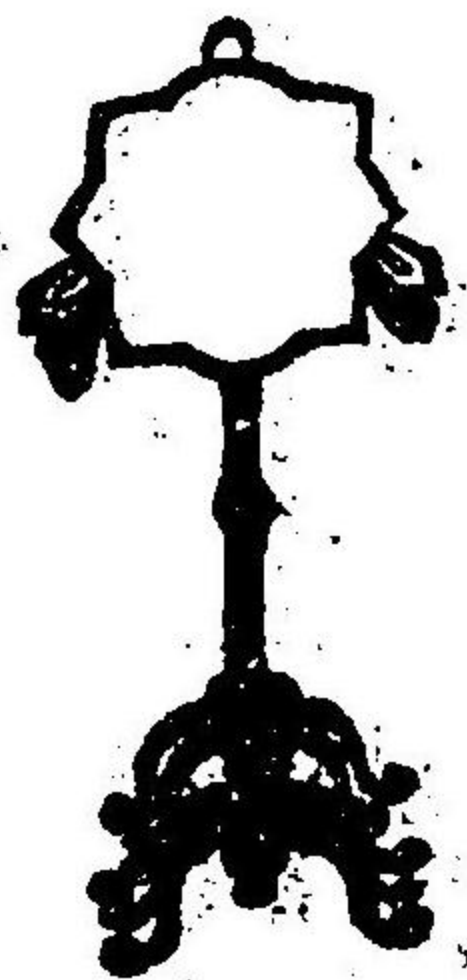
をみな我
よくも知らねど
慨きや
醜のるすきい
いつまでか
わを泣かすらん
ひとくにに
こひしき君を
さかり居らせて

琥珀枕

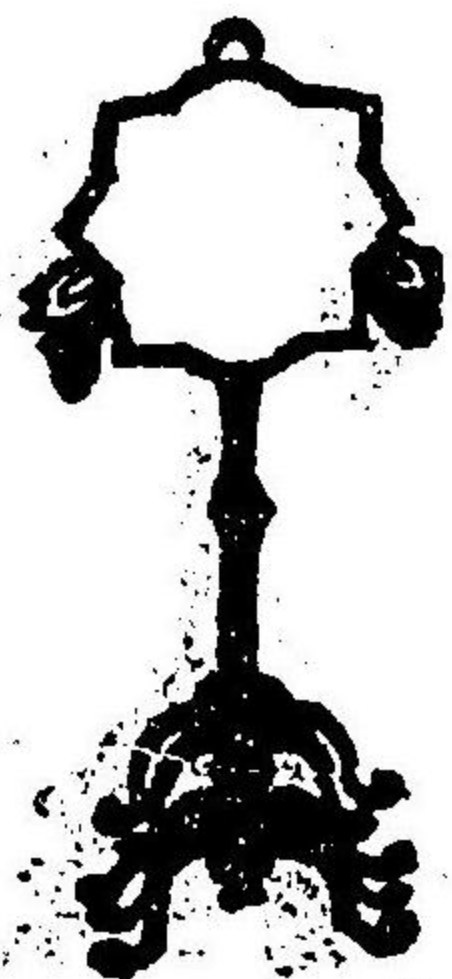
琥珀のまくら
人夢に来ず
朝戸あくれば
苔に花ちる
明鏡の塵
拂ふものうく
髻のみだれを
春の風ふく



うゑてより 君とまだ見ぬ 躑躅花
ひびやの園に ふたたび咲きぬ



をさな子を 蚊屋にねさせて
端居する ひとり寂しき
夏のよのつぎ



影かげ

なにすと 夜しつけき

聞くべき ささやきもなし

なにすと 星さむる

見つべき みすがたもなし

地のうへ 池のおも

われわが 影におとろく

追ふもの あるがごと

おぼえず 心をのく

庭下駄 ぬぎすてて

せはしく 戸さしかためつ

ねぬ夜の わが友と

ともしび 高くかかげつ

